DV幽霊

葵むらさき

目次

第 1 話 1
第 2 話 5
第 3 話 9
第 4 話 12
第 5 話 17
第 6 話 21
第 7 話 25
第 8 話 29
第 9 話 33
第 10 話 36
第 11 話 40
第 12 話 45
第 13 話 49
第 14 話 54
第 15 話 57
第 16 話 61
第 17 話 66
第 18 話 70
第 19 話 74
第 20 話（了） 80

第１話

この理不尽さ加減はどうだろう。

足は、私の腰をさっきから蹴りつづけている。
いつからだろう。
いや、腰を蹴りつづけられているのがではなく、この、足が私にとり憑いているのは。
きっかけは何だったか。
バグか。
ウイルスなのか。
もしかしたら、エロ動画を堪能した報いの――
と、そんなことを布団の中で横向きに寝転んで考えながら、私は腰を蹴りつづけられている。
随分と余裕たっぷりに対応できるようになったものだ。
もちろん当初は、まず驚き、おののき、うち震え、誰もいないこの一人暮らしの１Ｋマンションの部屋の中できょろきょろし、助けを求め、泣き、喚いたものだ――多少オーバーかも知れないが、そんな感じだったものだ。

状況を詳しく説明しよう。
私は、せんべい布団の中で、さっきも言ったように横向きになり、背を丸め両膝を曲げて寝転がっている。せんべい布団は体に巻きつける形だ。
一方足は、そんな私の腰を一・五秒に一回ぐらいのペースで蹴り続けている。
ごつ。
ごつ。
ごつ。

そういった感じだ。
ここで賢明なる読者は気づくだろう。
音、ちがくね？ と。
そう。

ごつ。

　ごつ。
　ごつ。

だ。決して、

　ぼふ。
　ぼふ。
　ぼふ。

では、ないのだ。
　賢明なる読者はまたここで気づくだろう。
　そう、つまり、この足は、私の腰を「布団越し」に蹴っているわけでは、ないということだ。
　ダイレクトに。
　私の腰直撃で、足は足を見舞っているのだ。
　もう一度言おう。
　私はせんべい布団を、体に――当然腰の部分も含め全身、頭にまで――巻きつけている。

　この理不尽さ加減はどうだろう。

　塩を撒いたことがあった。あれは足に出会ってから――否、取り憑かれてからどれくらい経った頃だろう。
　私はその時、憔悴していた。
　一体、これは何なのだ。この、足は。
　足は、足だけの存在だ。
　足だけがいて、そこから上の、人間でいう胴体だとか腕だとか頭部だとか、そういう他の部分はない。
　足の、人間でいうと膝から下の部分だけが、くっきりと見えている。
　足の――幽霊、だろうか。
　もし幽霊だとすれば、私が想像していたものとは随分様相が違うのだった。私のイメージしていた幽霊とは、透けていて、頭と胴体と、前方に恨めしげに差し出している手とがあって、そして――
　逆に、足がないものだった。
　とすれば、今現在私の腰をごつごつと蹴っているこの足は、幽霊というよりもむしろ「逆幽霊」とでも呼べる代物かも知れない。
　それはともかく、今ほどこの足の存在に慣れていなかった頃、私はどうにかしてそいつから解放される術はないかと考えあぐね、半ば泣きながら

「塩を撒いたらどうか」

という結論に達したことがあったのだ。
　塩にて何かしらお清めをするという風習は、今も残っている。塩だ。そうだ塩だ。
　その時の私はともかく必死だったから、お清めにはそれ専門の塩があるということにまで考察範囲を拡張するゆとりがなかった。塩ならば何でもいいと思った。
　溺れる者は藁をも掴むの心境で、私は台所の塩のもとへまろぶように駆け寄った。
　足はその時も、私の体を――腰だの尻だの背中だの――蹴り続けていた。
　私は食卓塩の瓶をつかみ、涙を堪えるためぎゅっと目を瞑りながら震える手で、それでも可能な限り大急ぎで、蓋を回し開けた。
　足は委細構わず、当然のことをしているかのように、私の体を１・５秒に一回ぐらいの速さで蹴り続けていた。
　恐怖と絶望のどん底にいたにも関わらず、その時の私には理性が残っていたと、今は胸を張って言える。
　何故なら、蓋の開いた塩瓶を私は、直接足に向けて振ったりしなかったからだ。
　そんなことをしていたらどうなっていただろう？
　恐らく塩は、ろくに瓶の口から放たれはしなかっただろう。チャッ、と音がして、量にすれば精々小匙一杯分かそこらほどの食塩が、空中に飛散しただけにとどまっただろう。
　料理の味付けじゃないんだから、そんな程度の塩を振ったところで意味はないのだ。
　そう。
　私はその時、腰を尻を蹴られつつも、必死で己の掌の上に塩をさらさらと流し出した。
　何度も何度も、瓶を振って。
　私の掌の上に、やがて塩の山が生まれた。
　足は、飽きることなく私を蹴り続けていた。
　首だけ振り向くと、足だけがくっきりと存在していて、私を蹴っていた。
　足の上辺は、闇だった。
　骨も筋も腱もなく、ただ吸い込まれそうな闇が、そこに見えていた。
「ああーッ！」
　私は叫びながら、足に向かって塩を撒いた。ぶつけた、と言った方が正確か。

　!!

　足の反応は、まさにこうだった。
　エクスクラメーションマーク二本。
　漫画などで登場人物が「!!」と叫び体を硬直させる絵が出てくるが、丁度そんな感じだ。
　足はその瞬間、あれほど執拗に――なかば楽しげにさえ見えるほど――繰り返していた私への暴挙を、ぴたり、と止めた。
　そして次の瞬間、蒸発するように消えた。
　私はしばらく、首だけ振り向いた形で茫然と立ち尽くしていた。
　消えた、のか……声にもならぬ呟きを漏らしたのは、何分後だっただろうか。

足は、清められたのか？
奴は、成仏したのか？
もう、私は腰や尻を蹴られなくてすむのか？
もう、足は私を許してくれたのか？　否、許すも何もないけれど――

その瞬間、足はものすごい形相で戻ってきた。

否、足は足しかないのだから、形相、というものがあるわけではない。
だがそうとしか言えぬほど凄まじく怒り狂った様子で、足は復活してきた。
そして前にも増して――正確に言うと前など足許にも及ばぬ勢いで、私を猛烈に蹴り直し始めた。尻を、腰を、背中を。
「いててててててて」
足に取り憑かれてから初めて、私は痛みを訴えた。
それまで、恐怖とか意味のわからなさは痛烈に感じていたものだったが、蹴りそのものはさほど強いものではなく、純粋なる痛覚というものを感じたことはなかった。
――ということに、その時私は気づいたのだった。
それまでの蹴りは、

ごつ。
ごつ。
ごつ。

であったし今もそうなのだが、その時に限っては、

ばきっ。
がすっ。
どかっ。

という表現が一番しっくりくる、そんな蹴り方だった。
怒りに任せて、足は蹴っていた。
何すんだこの野郎!!
まるで、そう言っているかのような蹴り方だった。

第 2 話

この理不尽さ加減はどうだろう。

前述の、その暴挙の中で、私の脳裡にまた別の想いが生まれたのだった。

――こいつは、俺に “供養” をして欲しいのではないのか？

そう。

この足は、私を頼って、頼りにして私の前に（というか正確には背後にだが）現れたのではないのか。

私に何かしら依頼したくて、期待を込めて、こんな風に蹴り続けることで訴えかけてきたのではないのだろうか。

なるほどそれならば、そうであると考えるならば、塩を撒くなどもってのほかの行為だと言わざるを得ないだろう。供養を頼んでいるのに、塩を撒くとは何事か。と足が思うのも、無理はない。

その晩はひと頻り足の怒りを身に（正確に言うと背と腰と尻に）受け、翌日私は会社帰りに仏壇店に立ち寄った。

供養、といっても、どうしたらいいのか見当がつかなかったのだ。身内が死んだわけではないから、寺に法要を頼むというのも筋違いのような気がした。

しかしそうかといって、いわゆるスピリチュアル系の、御祓い的なことをする「先生」に頼むというのも、甚だ遠い道のりに思えた。そんな知り合いもいないし伝手もない。探すとすればネットかタウンページかと思うが（「霊媒士」という項目が、あるのかどうかその時の私は知らなかった）、仮令（たとい）見つかったとしても恐らく……

値が張る。のは間違いない。

というわけで、私は街の仏壇店に行き、コンビニに入る時と同じような感覚で自動ドアをくぐり抜けた。

あ。ここコンビニじゃ、ないんだ。

次の瞬間その事実にまざまざと気付かされたきっかけは、店内中に立ち込める線香の匂いであった。

「いらっしゃいませ」

店員がしめやかに声をかけてきた。

よく鍛錬されたトーンバランスだ。

決して陰々としてなく、そうかといって決して軽々しくもなく、さりとて他所他所しいこともなく、いかにも我々遺族の悲しみにそっと寄り添ってくれているかのような、そんな誠実で穏やかな声――遺族？

「あ、あの、あ」
　私の発する言葉の、なんと素人然としたことだったか。情けなかった。
「仏壇をお求めでしょうか？」五十代ぐらいの、黒スーツに身を包んだ男性店員が柔らかな微笑と共に問いかけてきた。
「い、いえ、あの、えとー」
　私はすんでのところで、すいませんコンビニと間違えました、と言いそうになった。だがそれはぐっと呑み込むことができた。いくらなんでも、そこまで素人な人間がいるはずがない。店の外にまでぼんぼりやサンプル仏壇や線香だのロウソクだのの積まれたワゴンが並んでいるというのに、コンビニってお前……あ。
「あの、あのお線香を……貰えますか」

　咄嗟にいいことを思いついた。とその時の私は思った。
　線香と、それを立てる容器――コウロというらしい――とが入った紙袋を携え、私は自分の部屋の玄関前でひとつ深呼吸をした。
　これで、いける。
　深呼吸をしながら、そう思った。
　何が、いけるのか。
　よくわからないが、わからなかったが、とにかく「いける」という確信めいたものがあった。
　まあ言ってみれば「供養がいける」ということになるのだろうか。
　私は荷物を置き、手を洗って、買い物袋を開いた。
　金属製のコウロ――香炉をテーブル上に置き、香炉灰の袋をとり出してハサミで開封する。
　白く、きめの細かい粉末――つまり灰が、空気に圧されて袋の底に若干沈む。
　私はこぼさないよう注意しながら、香炉灰を香炉の中に移し替えた。
　余った香炉灰の袋の口を折り曲げ、セロテープで止め、今度は線香の箱を取り出す。
　緑色の、真っ直ぐに伸びた線香を三本、箱から抜き出した。

「ブッポウソウにキエするという意味で、お線香は通常三本立てるんですよ」

　仏壇店の慇懃な男性店員が、そう言っていた。
　ブッポウソウとは何かの植物の名――つまりブッポウ草のことなのかと思ったがそうではなく、仏・法・僧のことなのだそうだ。キエというのが何かまでは解説を得られなかったが、恐らく従うとか敬うとか恐れ入るとか、そんなニュアンスのものだろうと推測される。
　仏とは、お釈迦様のこと。法とは、仏教の経典つまりお経のこと。僧とは、僧侶つまり坊さんのこと。
　私は頭の中にそれらをイメージした。
　とはいえ、なにしろ真の意味でここまで、足に取り憑かれるまで、仏教になどまるで縁のなかった私だから――否訂正しよう、法事などには渋々参加していたが、心の底か

ら仏教に親しんでいたり敬意を払っていたり、増してや信仰してなどまったくいなかった私だから、仏法僧に関するイメージが甚だ幼稚で単純で――マンガ染みていたことは否定できない。そして、どうかそれについては海容を請い願いたい。許してほしい。

ともかく、漫画形式で表示されているとはいえ仏法僧を脳裡に描きつつ、私は三本の線香に百円ライターで火をつけた。

実をいうと、蝋燭も店員に奨められたのだが、ハンバーガーショップでポテトを断るのとほぼ同じ感覚で、つまり条件反射的に、私はそれを断ってしまったのだった。

もしかしたら、線香に百円ライターでダイレクト着火するというのは仏に対する無礼に当たるのかも知れない……そしてもしかしたら、百円ライター直着火したばかりに、足への供養効果も軽減してしまうのではないのか……

そんな危惧を抱きながらも、私は行為を途中で止めるわけにいかなかった。

それでも、試してみるしかなかったのだ。

線香の力で、足を、どうにかして欲しかった。

「お線香を焚くということは、仏と対話する、という意味があるんです」

慇懃店員の声が、また蘇る。

ああ。

仏は私と、対話してくれるのだろうか。

私に某か、知恵を授けて下さるのだろうか。

私の声を、苦痛を受け止めて下さるのだろうか。

私は合掌し、瞼を閉じうな垂れ、線香の香りを吸い込みながらひたすらに祈った。

足をなんとかして下さい。

どうかあの足を、成仏させてやって下さい。

もう二度と、私のところに出てこなくさせて下さい――

どれくらい時間がたっただろう。

私はやっと目を開き、たゆたう線香の煙を見た。

線香は、半分強ほどが燃えて灰と化していた。

静かな時が、流れていた。

ふと、顔を上げた。

あれ?

そういえば今日、帰ってきてから、一度も蹴られて、ない……

茫然と私は宙を見つめ、そして、少しずつ、あたかも導かれるがごとく、笑みを取り戻していった。

歓喜の表情が、私の顔面に広がり始めた。

足は。

足は、成仏したのか?　仏に導かれて?

私はもう、解放されたということなのか?

「あはは」私の喉の奥から、低い、だが歓喜の笑い声が迸り出た。「んふふふ、んはははは」

私は笑い続けながら、後ろを振り向いた。

足が、立ってこちらを見ていた。

私が声を失ったことはいうまでもない。
足は、立って、静かにこちらを見ていた。
いや、こちらをといっても、私を見ていたのではない。
足は、線香を静かに見ていたのだ。

「線香の煙で、仏様とお話するんです」

慇懃店員の声が、またしても蘇った。
足はもしかしたら、線香の煙を見ていたのかも知れない。
そこでもしかしたら足は、仏と本当に対話していたのかも知れない。
私などには測り知ることのできない、スピリチュアルな世界での対話というものを。
むろん、本当のところがどうなのか、それこそ測り知ることはできない。
なにしろ足はしばらく佇んで線香を見つめつづけたあと、ふと我に返ったように、私に気づいた。
なぜ足が私に気づいたことがわかったかというと、ご推察のとおり、私を蹴り始めたからだ。

あ。

という感じで足は、思い出したように私を蹴りはじめたのだった。

第 3 話

実際この理不尽さ加減というのはどうなのだろう。

例えば、天気だ。

古代の人は、雷が落ちたとか、日照りが続く、逆に異様な降水量だ等といった「穏やかならざる天候」を、神の、自然のスピリットのようなものの怒りと捉えていた。

供え物をしたり貢物をしたり生贄を捧げたり舞いを舞ったりイベントを開催したりして、彼らはその怒りを鎮め安寧を求めたりした。

それと足と、何の関係があるのか。

つまり私は、蹴られながら、こいつは天気と同類なのではないのか、と思っていたのだ。

いや、違う。

逆だ。

私は、天気というのはこの “足” と、同類なのではないか、そのように思ったのだ。

天気の左右というのは、気温だとか気圧だとか大気の移動だとかに拠る、物理的理論に適った現象だ。

と、一般的には言われている。

でも、どうして？

外国の映画の中によく出てくるセリフだが、「神の怒りだ」というのが非物理的な “気のせい” なのだとしたら、この足の現象だって “気のせい” ということになる。

こんなに、痛いのに!!

いや前にも述べた通りさほど痛くはないのだが、異様に執拗で面妖だ。つまり、不快で不愉快で、理不尽だ。

だが。

実はこの足のやらかしていること、これにも何か、物理的根拠、論理的法則、そのようなものが根幹にあるのではないのか。

つまり私は、蹴られるべくして蹴られているのでは、ないのか。

ごつ。

ごつ。

ごつ。

足が、私の腰を蹴る音だけが、私の耳に届いていた。届きつづけていた。

舞いでも、舞ってみようかな……

古代の、鵜を小脇に抱えたシャーマン的存在の女が、神勅を民に伝えんがため片足を上げ鵜を持っていない方の手を高く差し上げて踊っている姿が、ふと脳裡に浮かんだ。
あんな風に……なんか、鳥抱えて……ぬいぐるみじゃあ、効果ないんだろうな……なんか、カラスとか捕えられないだろうか……罠とか仕掛けて……
そんなことを考えつつ、そして腰を蹴られつつ、私はその日も眠りに落ちていった。

カラスは、無理だろう。
そうして翌朝目覚めた時、最初に私はそう思った。
まだ十分に覚醒したという自覚もないうちから、その思いだけがはっきりと私の脳内に言語として具現化した。
あいつらは、狡猾で凶暴だ。
それに捕まえるとしたら、捕まえ得るとしたら、その場所はゴミステーション近辺に限られるだろう。
あいつらは基本、ヒトの生活区域内で効率よく餌にありつくことを生業としている生き物だからだ。
そしてもし本気でカラスを捕えんがためゴミステーションに捕獲網など持って待機していたとしたら、私は恐らく、通報されるだろう。
しょっ引かれる破目に陥ること請け合いだ。
無理だ。
私には、舞いは舞えない。
そう結論づけたところで、はじめて私はハッと目を見開き、朝が来て自分が布団の上に置きあがっていることを知ったのだった。

出勤途中、通りかかったゴミステーションの近くにあるブロック塀の上に、カラスが止まっていた。
私は何故だか照れくささに似たものを感じ、通り過ぎざまちらりと横目でその鳥を見た。
カラスの方も、何か後ろめたさを感じているのか、すっと顔を横に向けた。

お前を抱いて、舞いたい。

突如そんな科白が脳裡に浮かび、その直後私は肌が粟立つのを感じた。
私は、何か常軌を逸した状態に陥りかけているのでは、ないのか。
あの、足のせいで。
気づくと私は、ゴミステーションのそばで茫然と立ちつくしていた。
ゴミを出しに来た近所の五十代くらいの主婦が、ゴミ袋を提げたまま私を上から下まで凝視した。
慌てて、逃げるように私は歩き出した。

舞いのことは、忘れろ。
歩きながら私は、心の中で自分に言い聞かせた。
大丈夫だ。私は、常軌を逸してなどいない。
だって、実際にはカラスなどまったく捕まえていないのだから。
舞いも舞ったりしていないし。
大丈夫だ。
何か他に、方策を考えよう――足に対して。カラスにではなく。

第 4 話

この理不尽さ加減は――と、嘆いてばかりいても勿論はじまらない。
私は思った。
足と『対話』をすべきではないのかと。
線香を焚いたとき、それは『仏との対話』になるのだと、仏壇店の店員に私は教わった。
その時はただ薄らぼんやりと、そういうものか。程度の意識しか持たなかったのだが、よく考えてみれば、仏とではなく、足とこそ、私は対話すべきではないのか。
しかし、どうやって?
足と対話したことは、ない。
つまりそれは、私の腰を蹴るあの足個人に対してという意味ではなく、世間一般的にいう足、汎世界的に存在する足、普通の、そこら辺にいる、というかある、足に対してだ。
当たり前だ。
世の中、犬や猫に対してヒト同様話しかける人間はざらにいるが、足に対して同じことをする人間を、私は見たことがない。
「あらーいい子ねえー」然り、
「お散歩しているの?」然り、
「大きくなったわねえー」然り。
ただし、一度だけ、自分の前足をじっと見つめる犬というものを、見かけたことはある。
その犬は――飼い犬なのか野良なのかよくわからないが――地に佇み、うな垂れて、右前足を上に持ち上げ、内側に向けた己の肉球を、見ていた。
会社帰りに見かけたものだったが、何自分の肉球見てんだこいつ、とその時は軽く吹いただけで私は通り過ぎたものだった。
石川啄木の「ぢつと手を見る」の句が、ふと頭をよぎったりもした。
あいつ、きっと貧乏なんだろうな。
そんな根拠なきヒトの妄想など、無論犬には思いも及ばぬことだったろう。
ともかく、今にして思えば、あの犬は、自らの足と「対話」していたのかも知れない。
けど、何を?
足と対話って、一体何を話せばいいのだろう?
世間話か? 政治の話? 趣味のこと? 最近の話題……例えばスポーツ関連とか?
いや。待て。
私はそもそも、何のために足と対話しなければならないのか?
目的を履き違えているのではないか?

足と対話して、何をしたいのか私は?　そう、それはもちろん――
どこかへ、消えて欲しい。
そういうことだ。
そういうことであれば、政治もスポーツもへったくれもない。
ただ足に「やめろ」「消えろ」「あっちへ行け」と、告げればいいだけだ。
言霊に、頼むのだ。

私はその晩自宅に戻り、いつものように近所のスーパーで買い入れてきた半値落ちの弁当をレンジであたため缶ビールとともに食した。
脚は、弁当を食べ始めて約五分経った辺りから、私への攻撃を始めた。

ごつ。
ごつ。
ごつ。

いつもの調子だ。食事中だろうが睡眠中だろうが、こいつには関係ない。
私は黙って弁当を食べつづけた。

ごつ。
ごつ。
ごつ。

足もまた、黙って私を蹴りつづけた。
やがて弁当は空となり、缶ビールの最後の一滴まで私は飲み干した。

ごつ。
ごつ。
ごつ。

足は、蹴りつづけている。
私はふう、と一息つき、首を後ろに振り向けた。
「やめろ」
言った。
足は、動きを止めた。
今にも次の蹴りを見舞わんとしている体勢のまま、足は停まった。停止した。
私はなぜか、心臓の辺りに熱い塊が生まれるのを感じた。それか何かはわからない。驚愕の想いなのか、言霊が「効いた」ことへの感動なのか、或いは足のその停止という反応に対する、警戒なのか――
どれほどの時間が経過したのだろう。数分といわれても、数十分といわれても、私に

は納得がいくかも知れない。
　だが恐らくそれは、ほんの数秒間、だったと思われる。
　私は足を、停まった体勢のままの足を見つめていた。
　どうすれば、いい?
　私の頭の中に、唐突にそんなことばが沸いて出た。
　そうだ。私はこのまま、首だけ振り向けた状態で、蹴りを見舞おうとして停まっている足を、いつまでも見つめているわけにはいかないのだ。
　何故なら、私には、そう、生活というものがあるのだ。
　生活などというと大袈裟かも知れないが、ともかく私は足を見つめてばかりで生きていくことはできない生き物なのだ。人間なのだから。
　そうだ。今こそ私は、足に出会う――もとい、足に取り憑かれる以前の、ごく普通の生活に、立ち戻らねばならないのだ。今が、その時なのだ。
「消えろ」
　私は、私の言うべき次の言葉を、言霊を、放った。
　足は、消えた。
　足のいなくなった空間を、虚空を、またしても私は自分では計測不可能な時間ほど、見つめていた。
　やがて、小さな苦笑が洩れた。
　一体何をしてんだ俺は? いつまでも、足のいなくなったところを見つめて。
　お前まさか、

　寂しいとか？

　それを思った瞬間、私の心臓付近にまたしても熱い塊が生じた。
　なんだと!?
　私は心中で、私自身に向かって怒鳴り返した。
　お前、何言ってんだ？　　馬鹿じゃないのか？　　誰が寂しいだって!?
　冗談も大概に――
　その瞬間、足は戻ってきた。
　何故それがわかったかというと勿論早速私を蹴り直しはじめたからだ。

　ごつ。
　ごつ。
　ごつ。

　茫然と、私は蹴りつづけられた。
　何故？
　どうしてこの足は、戻ってきたのか？
　まさか私が一瞬とはいえ、

寂しい

などと思ってしまったからか？
いや違う。
寂しい、など断じて私は思わなかった。
ただ自分自身の中に自分自身を「寂しいんだろ、やーい」と揶揄する声が生まれてしまったというだけだ。本質的には決して寂しがってなどいない。
私は首を二、三度振り、もう一度後ろを向いて
「やめろ」
と言霊を放った。
足は、やめなかった。
「止めろ」
私は、言霊の種類を変えた。
足はそれでも、止めなかった。
「蹴るな」
足は蹴りつづけた。
「消えろ」
足は消えなかった。
「どっかへ行け」
足はどこにも行かなかった。
「――」
私は言霊を失った。
はい引き出し空、という語句が、脳裡をよぎった。
そう、私の言霊ストックは、案外貧相なものだった。私はその時その事実に気づいていた。
ああ、もっと国語関係頑張っときゃよかった。本とかいっぱい読んで。こういう、足とかに取り憑かれるんなら。
私が己のこれまでの人生の来し方に後悔している間にも、足はテンポよく蹴りつづけていた。

ごつ。
ごつ。
ごつ。

「なあ」私は語りかけた。「頼むからさ」

ごつ。
ごつ。
ごつ。

「お願いします。やめて下さい」

　ごつ。
　ごつ。
　ごつ。

「やめていただけませんか。やめていただけませんでしょうか」

　ごつ。
　ごつ。
　ごつ。

「よろしければ、その挙動をお止めいただくことは可能でございますでしょうか」

　ごつ。
　ごつ。
　ごつ。

「――」

　私は、自分の頬が濡れているのを知った。
　何を言っても、通じない。
　言霊はおろか、懇願も、問いかけも、営業トークも、この足には聞き入れてもらえないのだ。
　暖簾に腕押しの、言語バージョンだ。
　そのことが――自分が何を言っても相手に伝わらないという事実が、こんなにもむなしく、そして哀しいことであるというのを、私は今、はじめて知ったのだった。
　私は首を再び前に向けた。
　弁当殻と空のビール缶が、そこに在った。
　洟が垂れそうになったので、手を伸ばしてテーブルの隅にあるティッシュを引き抜いた。
　洟をかみ、ついでに頬の涙も拭き取りながら、私はやっぱり思った。

　この理不尽さ加減は、何なのだろう――

第５話

そういえば、これも理不尽の一種ではある。
何がかというと、靴下だ。
その日は休日で、私は洗濯をしそれを干し、乾いた後取り込んで畳んでいた。
一人暮らしの身であるため、洗濯物がどうにも溜まりやすい。
というと、これこそが理不尽に聞こえるかも知れない。
逆じゃね？　とお考えの向きも、当然あるだろう。
だがそれは事実だった。
何故一人暮らしだと洗濯物が溜まりやすいか、その原因として「油断」そして「忘却」この二点が挙げられる。
つまり「あんまり少ないと水と洗剤が勿体無いから、もう少し溜まってからまとめて洗濯しよう」これが「油断」だ。
そして「おっ、今日は〇〇の発売日か、忘れずに店に早めに行ってゲットしないとな！」或いは「おっ、今日は〇〇戦か、録画もいいけどやっぱリアルタイムで観ないとな！　じゃそれまでに酒とつまみ買ってきとかないとな！」これが「忘却」だ。
そう、そもそも大事なアイテムの発売日や大事な一戦のある日に洗濯物の存在など覚えていられるはずもない。
そういうわけで、一人暮らしはとかく洗濯物が、ハッと気づけば大量に溜まっていることになる。
そして溜まり過ぎた洗濯物は、どうしても、あとちょっとのところで、一回分の洗濯機の許容量を、超えてしまうものなのだ。どうしても、洗濯槽の中にすべての洗濯物が入りきらない。
あまり詰め込み過ぎると機器に余分な負担がかかり、引いては電気代を無駄に食うような気もし、また最悪の場合機器の故障につながるのではないか。
そんな、杞憂といわれればそれまでだが不安が脳内をよぎるため、どうしても、洗濯のたびに少しずつ、洗濯物が余ることになる。
余った洗濯物は――次回の洗濯日まで、持ち越しだ。
何故なら、ほんのちょっぴりの余り分だけのためにもう一度洗濯機を駆動してしまうと、水と洗剤が勿体無いからだ。

以上述べたところの洗濯事情は、次のような現象を生む。
つまり「畳んでみると、靴下が片方しかない」という、現象だ。

そう、その日も私は洗濯をし、それを干し、乾いた後取り込んで畳んでいた。
その中で、よくある現象として、片方しかない靴下というのがあった。
片方だけの、靴下。
相棒にはぐれた、コンビの片割れ。
今日は、二種類あった。黒の無地と、ピンストライプ入りと。
彼ら靴下に言わせれば、これも理不尽の一種であるということになるのかも知れない。「はぐれたかよ」それぞれの靴下をそれぞれ半分に折りながら、私は語りかけた。「すまんな、いつも適当に掴み上げて放り込むからさ……まあ、いずれその内、再会するさ。仲間に」
そこまで言った時、私はハッとした。
片方だけ。
そして、振り向いた。

ごつ。
ごつ。
ごつ。

もう、私の日常生活のほんのひとこまと化したものが、そこに在った。居た。
足だ。

ごつ。
ごつ。
ごつ。

私は無言で、私の腰を蹴る足を見ていた。
奴も、片方だ。
奴は、右足だ。
右足だけだ。
奴には、仲間はいないのか？　　つまり、左足は？

ごつ。
ごつ。
ごつ。

しばらくして、私はまた前を向いた。首が疲れたからだ。
そうして、残りの洗濯物を引き続き畳みはじめた。
――というか、それをいうなら、奴の本体は、どこだ？
何故奴は、右足だけなのだ？
奴の体の他の部分は、他の場所に存在しているのか？
私の、タオルを持った手が止まった。

例えば、右手。
そして、左手。
或いは、胴体。
そして……首。
それらは、今どこにいて、何をしているのだろう？
まさかこの世の他の場所で、それぞれの部位を使って、誰か他の人間を――
攻撃し続けているのか？

ごつ。
ごつ。
ごつ。

私は腰を蹴られながら、洗濯物の残りを畳み終えた。
それからおもむろに立ち上がり、ノートパソコンのところへ行きそれを起動させた。
――だがしかし、それは果たしていいことなのか？
輝くディスプレイを見つめるともなく見つめながら、私は今から自分がしようとしていることの是非を脳内で問うた。
否、というよりも、むしろ何故今までそれをすることを思いつかなかったのか？
この、デジタルデバイス依存社会において。

ごつ。
ごつ。
ごつ。

足は、私がしようとしていることにお構いなく、蹴りつづけている。
私は、おもむろにマウスに手を置き、インターネットブラウザを開いた。
スタートページ中に表示されている検索バーをクリックし、キーボードに両手を置く。
――でも、何て？
「足」。まず私が入力したのは、その文字だった。スペースを空ける。
「蹴る」。不思議といえば不思議なくらい、私の脳内では多数のキーワードが奔流をなしていた。
しかし見ての通り、結果として入力バーに書きこまれる語句というのは、至極ありふれた、ごく普遍的かつ初歩的な、なんというか子どもでも思いつきそうなものばかりだった。
もうひとつスペースを空け、さらに何の単語をもって絞り込むべきか、私は考え続けた。
足 蹴る ……
「霊」。
マウスポインタを検索ボタンのところに持っていき、後はクリックするだけなのに、私の手は、不思議といえば不思議なくらい、震えていた。

果たして、いるのか、仲間は？
足の、仲間――と、いうよりも。
私の、仲間は？

第 6 話

　出てきた検索結果には、さまざまなジャンルの WEB ページが並んでいた。
　武道、サッカー、ゲーム、そして。
「霊の足に蹴られた」
という記事も、そこにはあった。
　私はそれらを――つまり「足の霊に蹴られた」もとい「霊の足に蹴られた」という記述のあるものを、次々に開いていき、読みふけった。
　動物霊。
という話が、多いようだった。
　動物の霊に憑依され、その霊に蹴られたり、或いは取り憑かれた者自体が壁や何かを蹴りまくる。
　そういった症例（というのか）と、浄霊で治癒させる話が、さまざま存在していた。
　浄霊――
　私の心は揺れた。
　足に取り憑かれた当初、それを考えないでもなかった。
　ただ、恐らくそういった作業を頼むとなると、金子が必要になる。
　それも恐らく、半端なき額の金子がだ。
　なので、心に浮かんだ直後、その方策を私は却下した。
　だが、どうだろう。
　もうすぐ、ボーナスも支給される。
　この冬のボーナスで、ひとつ奮発して、浄霊してみるというのはいかがか。
　どうせ、独り身だし。
　私はしばらくの間、考えた。

　ごつ。
　ごつ。
　ごつ。

　足は、その間も迷うことなく私の腰を蹴りつづけた。
　ふ、ふ。
　私の鼻から、元気のない笑いの呼気が漏れた。
「この冬のボーナスは、お前のために、奮発してみるかな。ルームメイトよ」

ごつ。
ごつ。
ごつ。

足は特に返事も反応もせず、蹴りつづけた。
こいつは、動物なのか？
ふと、そんな思いが胸をよぎった。
獣だから、言葉も冗談も通じないのか？
私は後ろを振り返った。
足は、いつもと同じ角度で、私の腰に蹴りを見舞っている。
それは、どう見ても人間の足そのものだった。
牛や馬や猪や猿や熊の足、ではなかった。
私と同様に、五本の指が一方向を向いて付いており、その指先には擬似四角形の爪が付いている。
血管もある――その中に、血が流れているのかどうかは知らないが。
ナイフで、さくっと切ってみようか――
私は首を振った。
なんて恐ろしいことを！
いや、なんで？
そしてすぐに疑問に思った。
恐ろしいって、何が？
足を、傷つけることがか？
いや別に、人の足じゃないんだから、そこはいんじゃね？
私は唇を引き歪めて笑った。
そうだ。どうせ幽霊の足だし。
切ったって別に、血も出なけりゃ痛みもないだろう……そもそもナイフの刃が通るものなのか？
私の内部でまた迷いが生じ、奔流となって脳内を駆け巡った。
切るべきか？
切らざるべきか？
もし切って、奴が怒って、また塩を撒いた時のように激しく蹴り飛ばしてきたら、面倒だ。
しかし、確かめてみたいのは事実だ。
切るべきか、切らざるべきか――そうだ。
つねって、みよう。
私の脳内に突然、奔流に挿された一本の竿のごとく、素朴な思いつきが現れた。
そしてその直後、私は手を背後に回し、私を蹴りつづける足の甲の表面に浮き出ている血管を、人差し指と親指でつまんだ。
指は、空を切りお互いの指の腹を合わせただけだった。
私はしばし呆然と指を見つめ、そして何度か、繰り返し足の血管をつままんとした。

だが結果は同じで、指は空を切りお互いの腹をぺちぺちとぶつけ合わせただけだった。
そして足は、その間蹴るのを止め、私が何をしようとしているのかを、観察していた。
無論、観察といっても足には目がない。
だが奴は、足は、私を蹴ることを忘れたかのように、じっと動きを止めて、私の所業——親指と人差し指による空中切りと、両指腹のぶつけ合い——が終わるのを、待っていたのだ。
幾度かの指空中切り試行後、指を離し、私もまた足を見下ろした。
私と同じような作りの、人間の、足。
その形状は恐らく、男のものだ。
指があり爪があり、脛毛も生えている。
血管が浮き、くるぶしも突き出ており、その内部に骨の存在も想像できる。
だが、つまめなかった。
私の手には、この足に触れることができなかったのだ。
私は自分の指を顔の前に持って来、じっと見つめた。
その時、足がふわ、と浮き上がった。
音もなく。
私はあ、と小さくつぶやき、足を見た。
私の、顔の前に持ち上げられた手。
その手の向こうに、足はいた。
しばらく私と足は、手を挟んで見つめ合っていた。
無論足には目がついていないが。
そして。
足はおもむろに、後方に下がり、それから私の手を、

ぱし。

と、蹴った。
手は弾みで、私の鼻を直撃した。
「あだ」
私は強く目を閉じ、のけぞった。
それは、吃驚するほど意外に痛かった。
しかも爪がもろに当たったため、下手をすると出血していたかもしれなかった。
「いてえな」
私は思わず眉をしかめて足に文句を言った、だがもうそこに足の姿はなかった。
何故なら奴は、すでに仕事を再開していたからだ。

ごつ。
ごつ。
ごつ。

腰を蹴られながら、私は呆然とパソコンのディスプレイを見つめた。
開かれたままの、浄霊サイトのページ。
黒いベタ背景に、大サイズの白いゴシック体が中央揃えで並んでいる、だが私はそれを見ていなかった。
私の手を蹴った時の、足の、せせら笑った顔が脳裏に焼き付いていた。
無論足に顔はついていない、だがそれでも、私にははっきりと判っていた。
足は、奴は、せせら笑ったのだ、その時確かに。
「へっ」
とか言って。
私は矢庭にマウスに、叩きつけるように手を置き、開かれている浄霊サイトのトップページへのリンクをクリックした。
連絡してやる。
ここのサイトの主に、浄霊を依頼してやる。
金子なんか、いくら掛かったって構うものか。
お前を、貴様を浄霊してやる。

第７話

　結論から言うと、そのサイトの主への連絡先は、見つからなかった。
　だがそのサイトが相互リンクしている他のサイトの中に、主が運営（というのか）している浄霊施設（というのか）への連絡先メールアドレスの表記が見つかった。
　私はそのアドレスに、相談メールを送った。
　文面はこうだ。
「数ヶ月前から私の腰を蹴りつづける足の霊に悩まされています。この霊を浄霊していただけないかと思い相談いたします。よろしくお願いします。連絡をお待ちしております」
　送信後も、足は私を蹴りつづけていたが、私は微笑みさえ浮かべて床に就いた。
　これで、恐らく解決だ。
　専門家の力で、自分は救われるだろう。
　また元の、平和な日常に戻れるんだ。
　私は、腰を蹴られ始めてから初めて、安堵の眠りといっていいものを味わった。

　返事は翌日早速届いた。
　文面はこうだ。
「この度は浄霊のご依頼有難う御座います。本来ならば教主自らがお力になるべく馳せ参じたいところでありますが、何分浄霊の需要は大変に高く、すぐに赴く事かなわぬ事情につき、先づは徒弟の者が詳しいお話を伺い、危急の事態でありましょう故可能であればそのまま浄霊を施させて頂きたく、どうぞ宜しくご理解下さいませ」
　えらく堅苦しいが、教主とは恐らく高齢の人なのだろうと察して私は「理解」することにした。
　返信のメールには、電話番号がしたためられてあった。
　私は携帯を握り締め、そこに電話した。
「はい、文殊の里でございます」
　電話に出たのは、若い男だった。
　私は名を名乗り、メールで浄霊を依頼した者であることを告げた。
「ああ。はい」男はあまり抑揚のない声で、だが私の名前は聞き及んでいるらしき雰囲気で返事をし「今担当と代わりますんで、ちょっとお待ち……」ください、がもごもごとして聞き取れなかったが、とにかく取り次いでくれるようだった。
　それから三分、私は『乙女の祈り』を聴きつつ待たされた。
「はい。もしもし」
　突如、大音響といっても過言ではない女性の声が『乙女の祈り』を撃ち破って私の鼓膜を攻撃した。私は思わず携帯を耳から離した。

「もしもし？　もしもーし」
　女性の声は更に高デシベルとなり、私は顔を苦痛に歪めずにいられなかった。
　足に蹴られている時でさえ、こんなに顔を歪めることは、最近ではなかった。
「すいません」
　私は携帯に口だけ近づけて声を発した。
「浄霊を依頼した者です」
「はーい。こんにちは」
　女性の声は素早く機嫌の良いものとなり、元気良く私に挨拶した。
「私がこのたび担当させていただきます、熱田と申します」
「あ、はい。よろしくお願いし」
「足に蹴られてるんだって？」
　女性は私の言葉尻を蹴り、そしていきなりタメ口に切り替えて話し始めた。
「あ、はい」
「足だけ？」
「あ」
「つまり体の他の部分、胴体とか頭とか腕とか、そういう他の部位というものは、出てこないのね？」
「ええ、足」
「それは一般的には、動物の霊、それも人間が死んで、動物になって、その霊がこの世に未練を残しているものだって言われているわ」
「ああ、どうぶ」
「けれど動物の霊となると、ちょっと厄介な面もあるのよ。一度あなたご自身の人となりを、実際に見てみないとわからないわ。直接お会いできる日がありますか」
「えと」
　私は気圧されつつも、熱田と名乗る女性と面談の約束を取り付けた。
　電話を切り、携帯をテーブルに置いた後も、左耳が戦闘体勢を取っているのが判った。
　私はため息をつきながら、そっと耳をさすった。
　熱田氏の声は、中年層――少なくとも四十代ぐらいのものと察せられた。

　約束の場所は、なんとファミリーレストランだった。
　土曜日、午前十時。
　決して、客が少ないことはないだろう。
　いや、仮に少なかったとしても、むしろそっちの方が問題かも知れない。
　熱田氏はそこで、そんな場所で、あの声で、あのデシベルレベルで、語るのだろうか。
　幽霊について。
　もうひとつ、懸念材料があった。
　今私はこの電話を、浄霊依頼の電話を、自室からかけた。
　夜七時、会社から定時で急ぎ帰り、食事も取らずメール確認し、直後にかけたのだ。
　今は、七時半。
　その間、足が、まったく姿を見せなかったのだ。

うんともすんとも、ごつともばきとも、私の腰は鳴らなかった。
足は、何処にいるのか。
何処かで、私の電話の内容を、聞いていたのだろうか。
奴には、私の話していたことが、理解できたのだろうか。
それで、姿を見せないのか。
奴は、足は今、何を思っているのか。
嫌な予感が、した。

翌日も、その翌日も、足は現れてこなかった。
だが私は、それを決して「安寧の日々」と称する気にはなれなかった。
そう、私の脳裏によぎる名は、
「嵐の前の静けさ」
というものに他ならなかった。
指定されたファミリーレストランに着くと、私は指定された通り窓際の席を希望した。
電車を乗り継ぎ、徒歩で十五分ほどかかって辿り着いたその店は、海に面した立地で、今日は天気もよく、窓から臨む景色は非常に心地よい、美しいものだった。
海面に踊る光の粒を眺めながら、私は半分うっとりと現実を忘れていた。
こんないい店に来るんなら、どうせなら、恋人と二人で来るのがいいよなあ……
恋人か……
そういや、あの子元気にしてるのかな……
別れたの、いつだっけ……
もう、二年近くなるのかな……
もっとか……
もう、新しい彼氏とか、いるんだろうなあ……
携帯、変えたかなあ……
思い切って、連絡してみるかな……
そう、この店に、誘い出して……
いい店を見つけたから、君にもぜひ教えたくなって、とかさ……
この景色を、君にもぜひ見せたくて、とかさ……
そうだ、ここなら夜景も、きっと素敵だろうな……
月とか、星とか眺めながらさ……
街灯りにはない、素朴な煌きがなんともいえず二人を

「こんにちはあ」

突如として大音響が、私の夢想を瞬時に打ち砕いた。
ハッとして見上げると、恰幅の好い女性がそこにたちはだかっていた。
最初に目に飛び込んできたのは、その女性の唇の、びっくりするほど不透明なピンク色だった。
「大分、お待たせしてしまったかしら？」

ニコニコと満面に笑みを浮かべながら、女性は私の真向かいに座り、名刺を差し出してきた。
私も慌てて、財布から名刺を取り出し、仕事の時よりも遥かにまごつきつつ、女性のものと交換した。
「それで、早速まず訊きたいんだけど」
簡単な自己紹介の後、女性――熱田氏――は急くように切り出した。
挨拶の時と違い、通常の人間の会話レベルの音響だった。
もしかすると、挨拶だけは元気良く、というのがこの浄霊団体の主義であるのかも知れない――
「あなた、身寄りはあるの？」
「はい？」
私は思わず、熱田氏の小さく窪んだ瞳を真正面から見返して訊き返した。
「身寄り、ですか？」
「そう。ご家族」
「あ、はい、故郷に両親が」
「そう」
熱田氏は、ニッコリと笑みを浮かべた。
「ならよかった」
「え？」
「万一の時にね。一応」
「――万一って？」
「つまり、万一あなたが孤独死した時、遺体を引き取る人がいるかどうかっていうのを確認しておきたかったの」
熱田氏は、私の疑問に答えて言った。
「――」
私はただ、熱田氏の小さく窪んだ瞳を見つめ、言葉を失っていた。
そう。
私は、懸念していた。
ここに来る前、電話で面談の予約を取り付けた後、ふと不安に思ったのだ。
それは、熱田氏が、電話で聞いたあの大音響で、周りに客のいる店内において、幽霊の話をぺらぺら喋りまくるのではないかという、不安だった。
そんなことをされては、衆目を集めること間違いない。
だが不安は、的中しなかった。
熱田氏は、彼女は決して超弩級のデシベルレベルで霊のことなど喋ったりはしなかった。
ごく普通の音量にて、彼女は語ったのだ。
私の “孤独死” の可能性について。

第 8 話

私が呆然と熱田氏を見つめている間、熱田氏は「機嫌好き無表情」とでも表現し得るような顔で、ただ私を見つめ返していた。

ニヤニヤしてもいなければニコニコもしていない、さりとて怒りや悲嘆の感情を浮かべているわけでもない——

いつの間に呼んだのか、テーブル脇に来た店員に向かって熱田氏はドリンクバー二人分を注文し、私に何を飲むか訊ねた。

私は恐らく「コーヒー」と答えたのだろう。

何故なら熱田氏がその後、私の目の前にコーヒーを運んできて置いたからだ。

俺は、あの足に、殺される可能性があるってことか——

私の脳内とその他すべて体内に、その考えが詰まっていた。

それはやっぱり、蹴り殺される、というやり方でなのか——

たとえ痛みはそれほどではないとしても、やはり同部位に何度も繰り返し攻撃を受け続けると、ダメージが蓄積してやがては致命的な状態になるということなのか——

あいつは、俺を殺すのが目的なのか？

俺に対して、殺意を持っているのか？

脳内をぐるぐる回る、という表現がまさにぴったりだったが、その他すべて体内までをも、その考えはぐるぐる回っていた。

懐いてさえ、いるものかと思っていた——

私の、脳内かまたはどこか体内の片隅に、そんな想いがぽつねんと生まれていた。

俺の、勘違いだったのかな——

あいつは俺に懐くどころか、殺意さえ持って、それでどすどす蹴ってきていたんだ。

俺を、殺そうとして。

「まあ、飲まないの？」

熱田氏の笑いを含んだ声に、私はハッと現実に連れ戻された。

「冷めるわよ」

熱田氏は自分のコーヒーカップを顎の下に持っていきつつ、私のカップを顎で示した。

私はカップを手に取り、ブラックコーヒーを一口すすった。

その様子を熱田氏は、やはり “機嫌好き無表情” で、無言のまま見ていた。

私が、ほとんど減っていないコーヒーのカップを皿の上に置くと、熱田氏も同じ所作をし、それから両袖をまくり始めた。

「じゃあ、そろそろ始めるわね」

「え」

私は顔を上げた。
熱田氏の、白く逞しい両腕が露になっていた。
「熱田スペシウムっていうの」
熱田氏は言って、超ピンク色の唇を左右に広げニヤリと笑った。
私は言葉もなく、眉を持ち上げて「何ですかそれ？」という質問の代わりにした。
「つまり私独自の、霊視のやり方でね」
そう言いながら熱田氏は、右腕を顔の前に立て、その肘の辺りに左手を横向きの手刀の型にして添える、というポーズを取った。
「こうやって、ここから分泌するの。熱田スペシウムを」

ぞわっ、とした。

ぞわっ、としか、言えない感じだった。
背中から、その他全身に、一瞬のうちに鳥肌が立つのがわかった。
目の前に、よく実った大根のような、熱田氏のむき出しの前腕がある。
産毛がうっすらと見てとれる。

「分泌するの」

熱田氏の周波数高めの声が、余韻として響き渡った。
「分泌」
何が。
いったい、何が出てくるのか。
その、逞しい前腕から、何が。
「分泌」って。
いったい、どのように。
「わああ」と叫んで立ち上がりたい衝動に駆られた。
だが私は、ぎゅっと目を瞑って耐えた。
理性が、まだ私の体内に——脳内はわからないが——残っていたのだ。
いわゆる「嫌な汗」がじっとりと、それこそまさに“分泌”された。
それで余計に、私の中の嫌悪感が強まった。
「分泌」って、つまりこの汗のように、この女は霊視するための“何か”を、その前腕から放出させるのか。
見えない何かを。
私に向かって。
じんわり、じわじわと。
説明のつかない気持ち悪さが、私を完全に包み込んだ。
私は、息を喘がせた。
やめろ。
「や、め」

　声にならない抵抗の言葉が、唇の間から洩れた。
「頑張って」
　熱田氏は表情を変えることなく、私にそう告げた。
「負けないで。少しの間だから」

　汚らわしい！

　私の中で、そういう言葉がはっきりと形どられた。
　そうだ。
　私は「分泌」という言葉から、いや、熱田氏の行動から、いや、熱田氏その人そのものから、何かしら汚らわしい、忌避すべきものを、その時強く感じていたのだ。
「ものすごい抵抗ね」
　熱田氏はほんの少し目を細めた。
　ポーズは変わらない。
　脂汗を浮かべ息も絶え絶えの私の視野の隅に、店員の少女が驚いたように目を見開いてこっちを見ている姿が映った。少し離れたテーブルの上の食器を片付けていて、私たちの様子に気づいたようだ。
　彼女はそばを通りかかった、先輩らしき他の店員の少女に声をかけ、一瞬だけ私たちの方を指差して何事か囁いた。
　先輩店員もちらりとこっちを見たが、ああ、という形に口を開き、やはり短く何事か説明した。
　後輩店員の方は、目を見開いたままだったが納得したように、同じくああ、という形に口を開き、そして
「熱田さん」
と、呟いた――声は届かなかったが。
　そうか。
　私は朦朧とした意識の中で、理解した。
　ここは、このファミレスは、熱田氏の「行きつけの場所」なのだ。
　彼女はいつもここで “依頼者” と面談しているのだ。
　そして恐らくいつもここで、今日と同じように、熱田スペシウム光線を “分泌” しているのだ。
　霊視のために。
　つまり彼女はこの店の「有名人」なのだろう。
　ああ。
　ぜってえ、来ねえ。
　彼女となんか。

「ここ、いいだろ。俺さ、前ここで霊視してもらったんだよ。熱田スペシウム分泌する人に」

死んでも来るか。
やがて熱田氏は、両腕を下ろした。
小さな目は、じっと私を見たままだ。
彼女の腕が下りてすぐ、私も何かから “解放” された。
そうとしか、表現できない気分だった。
何かの束縛、或いは呪縛から、解き放たれた感じが強くした。
「なかなか、手強いわね」熱田氏は小さく首を振り、彼女の声帯の発しうる最低域の声でそう言った。「はっきりした正体はわからなかったけど……恐らく “哺乳霊” ね」
「――」ホニュウレイ？　哺乳類の、霊？
私は呆然と熱田氏を眺めることしかできなかった。
久しぶりに酸素呼吸をしているという実感を抱いていた。
「哺乳類の霊よ」
熱田氏はニコリと笑った。
「略して哺乳霊」
何故略す必要があるのか。
だがそれも、どうでもよかった。
「だけど、動物霊なのか人間の霊なのかまではわからなかった」
熱田氏はコーヒーカップを持ち上げすすった。
私はげんなりした。
今は、自分自身でも何も口にしたくないし、人が何かを口にするところも見たくなかった。
外の、新鮮な空気を吸いたかった。
「ま、今日はこれくらいにしときましょう。疲れた？」
熱田氏は立ち上がり、伝票を手に取った。
「あ、私が払います」
私は反射的に伝票に手を伸ばした。
しかし、伝票の方も、熱田氏の方も、見ていなかった。
手だけが、反射的に伸びたのだ。
職業上の癖のようなものだろう。
「いいわよ、経費で落ちるから」
熱田氏はひらりと私の手をかわし、さっさと会計場へ向かった。
経費って――
会議費で？　まさか接待交際費じゃないですよね？　ドリンクバー二人分なんて、五千円以下もいいとこなんだから損金算入のためには
私の脳は、自分の現状から目を背けることに必死だったのかも知れない。
そして体は、ただちに扉を抜けて外へ出、そしてただちに走り出し、熱田氏から永久に離れたいという欲求に、必死で抗っていた。

第９話

熱田氏は別れ際、また電話で連絡をすると言った。
私は咄嗟に、電話ではなくメールで連絡するようにと依頼した。
依頼しながら、たとえメールが届いたとしても恐らく返信しないだろうと思った。
ことによると読みさえもしないかも知れない。
もう、この人間に会いたくない、声も聞きたくない、と思った。
恐らく電車を乗り継いで帰ったのだろうが、私は気づくとマンションの自室のドアの前に立っていた。
昼を大分回っていたが、何も食べたくない、口にしたくなかった。
無理に食べたとしても、いろいろな意味でそれは私の体に吸収されそうにない気がした。
着替えもしないまま床に倒れ込み、うつ伏せのまま私は数時間気絶した。
目を開けると、夕焼けの光がカーテンの隙間から差し込んでいた。
のろのろと体を起こす。
しかしそれから何をすればいいのか、まったく頭に浮かばない。
私は日が暮れるまで、床の上に呆然と座り、窓の向こうから聞こえてくる音を耳に受け止めていた。
「おかあさーん」小学生ぐらいの子供が大声で母親を呼ぶ。
「〇〇はー？」母親も大声で何か訊いている。
「□□ちゃんとこに行ったー」子供が大声で答える。
「△△だから帰っておいでー」母親は大声で指示を出す。
車のエンジン音が近づき、遠ざかり、また近づき、遠ざかる。
部屋の中はだんだん暗くなってゆき、カーテンの隙間からは外部の建物の照明が洩れ始めた。
喉が、渇いた。
そのことに気づいたお陰で、私はずい分久しぶりに体を動かした。
立ち上がったときに、少し眩暈がした。
キッチンへ向かおうとして、私はぎくりと硬直した。

薄闇に慣れた私の目に、足が映ったからだった。

足は、リビングとキッチンの境のところに、足一本で立っていた。
私の心臓は早鳴りを始めた。

　汗が噴出し、呼吸が浅くなった。
　足は無表情に、無言のままそこに立っていた。
　何か、言うべきなのだろうか――
　私の頭の中に、どうしてかは分からないが、そんな思いが生まれた。
　今ここで、私は足に向かって何か言葉をかけるべきなのか――
　まったくもって、何故そのようなことを思ったのか皆目分からなかった。
　声をかけるって、家族じゃあるまいし。
　そもそも私はこの足を浄霊しようとしていたのではないのか――
　まさか。
　まさか俺は、足に対して、何か後ろめたさのようなものを感じているとでもいうのか。
　或いは申し訳なさ、というようなものを。
　私は、自分の中に生まれた仮説を否定するため首を振った。まさか。まさかだ。
　それに声をかけるといっても、何と言えばいいのだろう。
「ああ、お帰り」と？
　いや、むしろ
「ああ、ただいま」か？
　待て、もう一度確認するが、足は別に俺の “家族” ではないのだから、そのような言葉をかけるのは妙だ。
「ああ、いたの」辺りか？
「まだいたのか」ぐらい言ってもいいのか？
　その時。

　ぺた、と、足が一歩を踏み出した。

　私は足を見た。
　いや、ずっと見てはいたが、ぺた、と一歩踏み出した足にハッと注目したのだ。
　改めて見た、とでもいうのか。
　だがその “注目” は、生温かった。
　なぜなら次の瞬間、足が足の甲で私の左頬に蹴りを食らわしたのを、避けきれなかったからだ。
　それは “油断” だったのかも知れない。
　今まで散々腰を蹴られ続けていた相手つまり足だが、にも関わらず私は、そいつに対して注意を怠ってしまったのだ。
　まさか足が、私の顔面を蹴るとは思っていなかったのだ。
　左頬を蹴り飛ばされて――足に “ビンタを食らった” というのは、正しい日本語ではないものだろうか――私は一瞬、自分の身に何が起こったのか理解できずにいた。
　いて。
　え？
　何？
　そんな感じだった。

足は続けて、今度は私の鼻の下に蹴りを見舞った。
私はぎゅっと目を瞑り、苦痛に眉をしかめた。
「何す」
言いかけて開いた目に、足の、足の裏が映った。
それはその直後、私の視界を真っ暗にふさいだ。
ふさがれたのは私が再び目を閉じたからでもあり、顔面全体に蹴りを食らった私はバランスを崩して尻餅を突いた。
声を挙げるいとまもなかった。
足は、私の両頬に足で往復ビンタを食らわし、私はそれを避けるため床に顔を伏せ這いつくばった。
足は、今度は私の後頭部を上から思い切り踏んづけてきた。
私の心の中には、無論恐怖や苦痛もあったが、同時に不思議なものを見る想いも生まれていた。
重量が、ある。
そう、今までは腰にしろ背中にしろ、そして今の時点での顔面にしろ、横からの攻撃に限られていた。
そのため、この足に“重さ”があるなど、意識したことがなかったのだ。
しかるに今、私の後頭部、襟足、そして背中と、上から踏みつけてくる足、それには、びっくりするほどの“重み”が、感じられる。
比喩ではなく、物理的な重さだ。
足は足しかないくせに、一人前の男の大人並みの重量を備えている。
ずっしりと、重い。
なんでこいつ、こんなに重いんだ？
何度も踏みつけられる内、次第に私の意識は薄ぼんやりとぼやけてきていた。
そんな中で私は、今や恐怖よりも、不可思議さに包まれていたのだ。
素材か？
こいつ何で出来てるんだ？
金属か？
重金属？
そんなことを、とりとめもなく思っていた。
そうしてやがて、完全に私は気絶した。

第 10 話

翌朝目覚めてからも、首筋や後頭部、そして顔面全体に、痛みが残っていた。
私が意識を失った後も、足は私を踏みつけ続けていたのだろうか。
さぞや顔面痣だらけになっている事だろう――
そう思いつつ覗いた洗面所の鏡の中の私の顔には、傷一つなかった。
いつも見慣れている通りの、いつものままの私の、美しくはないがきれいな顔だった。
私は茫然と、鏡に手を触れていた。
鏡は冷たく、当然ながらツルツルしていた。
それどころか、目ざめてすぐの時に感じていた痛みの “余韻” すらも、いつの間にか消えていった。
私は訳が分からないまま、だが心のどこかではほっと安心しつつ、身支度をして通常通り職場へと向かった。

私が顔面に暴行を受けたことに気づく者は、当然ながら誰一人としていなかった。
誰も私を注視せず、誰も私に心配そうに声をかけてこなかった。
私が、既に痛みは消えているが昨夜確かに足に踏んづけられた首筋の辺りを手でさすっていると、首が凝るのか、少し休めと同僚から声はかかったが、首が「痛むのか」、首を「どうかしたのか」、首に「何かされたのか」と訊く者は誰もいなかった。
痛みはない、傷もない、だが記憶は鮮明にある。
はずだった。
夕刻を過ぎ夜になり、帰途に着く頃、私の中でついにその記憶さえあやふやになり始めてきた。
それは、夢だったのか？
昨日受けた “浄霊”――というか “プレ浄霊”――による、あまりのダメージに、帰宅後知らないうちに意識を失い、足が、腰ではなく顔を蹴りにきた “夢” を、見てしまったのではないのか。
浄霊なんか、したから――しようとしたから――
俺が、いけなかったのかな。
私は虚ろな目で帰途に着いた。
自分の撒いた種。
そういう言葉が、脳内をよぎっていた。
部屋の前に立つ。

鍵を取り出す。
だが玄関ドアの鍵穴に、中々手が伸びようとしない。
目の前に迫ってきた足が、奴の足の裏の皺の一筋一筋が、鮮明に思い出された。
私は目をぎゅっと瞑り、強く首を振った。

「こんばんは」

女性の声が、右手から控えめに聞こえて来、ハッとして顔を向けた。
二件隣に住む主婦だった。あいさつ程度しか交わしたことのない相手だが、玄関の前で立ち尽くす私の姿に異質さを見出したのかも知れず、その声はいつもより遠慮がちに聞えた。
表情は、一瞬しか見なかったが（後は私の方がさっと下を向いてしまった）やはりどこか気づかうような、心配そうなものだったかも知れない。
私は蚊の鳴くような声で「今晩は」と返し、そそくさとドアを開け中に入った。

部屋は、いつもと同じ、薄闇の世界だった。
私は震える手で、照明のスイッチを入れた。
足は――いるのか？
足は、奴はそもそも人間でないものなので “ひと気” がまったく感じられない――冗談のつもりでは無論ないが、人が存在している時に感じられるような雰囲気、ムード、つまるところひと気は、奴からは微塵も感じられない。
そして奴はまた、動物でもない。
犬とか猫とか、あるいは他の生き物でもいい、いわゆる愛玩動物の類ではない。
なので、私が帰って来たからといって餌をねだりに来たり頭を撫でてもらいにきたりすることも一切ない。
私が足に「出迎え」を 受けることは、決してないのだ。
キッチンにも、リビングにも足はいなかった。
トイレにもだ。
私は部屋着に着替え、床にぺたりと座り込んだ。
買ってきたビールの缶を開けたのは、座ってから約五分後だった。
だがそれを口に運ぶ前に、私はあることを思いついてそれをまたテーブルに戻し、立ち上がった。
メールだ。
熱田氏から、その後連絡は届いているのか。
上着のポケットに入れたままにしておいた携帯を取り出してみた。
新着メールが三件ある。
私はこの時まで、それにまったく気づかなかった。
開いてみると、うち一件は確かに熱田氏からのものだった。

・・・・・・

先日はありがとうございました。
浄霊にかかる料金についてご連絡します。
祈祷料五万八千円（税込）
式準備費 二万六千円（税込）
器具代 四万六千円（税込）
以上で、合計十三万円（税込）となります。
分割払をご要望の節は、このメールへのご返信にてお申し付け下さい。
併せまして、次回面談のご都合を教えていただければ幸いです。
・・・・・・

「じゅうさんまんて」
私は苦々しく目を細めた。
「さすがというか、あれだな、なんていうか、あれだね」
だが正直なところ、それが適正額なのか否か、不適正なのであれば妥当な金額というものがいかほどなのか、比較すべき相場として何を参照すればよいのか、皆目わからなかった。
私はメールの文面を見下ろしながら、手だけを背後のテーブルに伸ばし、ビールの缶を取り上げた。
冷たい缶が手に触れた――というよりも、明らかにさっきまで持っていた缶より、それは何倍も冷たかった。
ハッとして顔を振り向けた。

足が居た。

と思った直後、足は私の顔面に蹴りを食らわした。
私は衝撃と痛みに顔を歪め倒れた。
足の猛攻撃が始まった。
私は全身を丸めて、団子虫のような体裁で身を守った。
そうしながら、さっき手に触れた “冷たい” 感触を思い出していた。
あれは、足だ。
私の手は、足を掴んだのだ。
いや、違う。掴んだのではない。
手は何も掴むことはできなかった。
ただ、この世ならぬ冷たい “もの” に、私の手は触れたのだ。
いや、それも違う。何にも、触れていない。
そう、いちばん近い表現はこうだ、この世ならぬ冷たい “領域” の中に、私の手は入り込んだ。
そういうことだ。
あれが、足の体温なのか。
蹴られながら、私はそう思った。

足は、私の頭から背中から尻から脚まで、ありとあらゆる部位に痛烈な蹴りを食らわし続けてきた。
それは執拗で、激しい怒りというものを感じさせた。
足は、怒っているのだ。

第 11 話

翌朝、洗面所の鏡を覗くと、やはり私の顔は無傷のままだった。
一体、どういうしくみなのだろう。
私の中に、ある意味 “興味” と呼べるものさえ生まれた。
間違いなく痛いのに、間違いなく触感はあるのに、間違いなく蹴転がされているのに、どうしてその痕跡はまったく残っていないのだろう。
錯覚なのか。
やはり私自身の精神の部分に、何か重大な問題が生じているのだろうか。
もしそうだとすれば、私の行くべき所、頼るべき機関は、あんなぼったくりの浄霊屋ではない、ということになる。
そう、同じ十三万円を払うのであれば。
どうすればいいのか。
自分の身の振り方を考えあぐね、私は吐き気を催しつつも、出勤の途についた。
部屋の中にはいたくなかったし、他に行く所も思いつかなかったし、社会人としての理性がまだ自分の中に、もしかすると必要以上に、活きていたのだ。
そして仕事は、多忙さというものは、私を救ってくれた。
私は業務に集中し、その間足のことも、自分が異常かも知れないことも、浄霊屋の甲高い声や太い腕のことも、すべて忘れていられた。
だが悲しいことに、仕事というのは二十四時間、続けていられるものではない。
退社時刻がこなければいいのに、とはっきり願う日が来ようとは、想像もしたことがなかった、だがそれは来た。
会社を出なければならない。
自宅に、戻らなければならない。

私はしばらく街を彷徨った後、一人で居酒屋に入った。
お疲れさんコース、という名前のメニューを頼み、小鉢三点と共に運ばれてきた生ビールを呷る。
枝豆をつまみながら、カウンターの隅で一人ため息をつく。
どうすればいいんだ。
一杯目のビールを飲み干し、二杯目を注文し、それが届くまでの間両手で自分の頭を抱え肘を突いて待っていた。
カウンターの後ろに畳敷きの小上がり席が並んでおり、その一席に集まっていた女子会らしき集団の、楽しそうにはしゃぐ声が耳に届く。

私はスーツのポケットから、携帯を取り出した。
ビールが届いた。
それを飲みながら、アドレス帳を開く。
その名前は、さ行の中に登録してあった。
未だ、削除していない。
ビールをジョッキ三分の一空けるまで、私はディスプレイを見つめていた。
メールでも、ネットでも、ゲームでもない、アドレス帳の画面をだ。
そしてその間三度、その相手のメールアドレスからメール作成画面を立ち上げては消していた。
そう、私は、別れた彼女にメールを送ろうかどうしようかと迷っていたのだ。
仮に送るとして、何と送ればいい？ 何と送る？
「元気？」
「今一人で飲んでます」
「最近調子どう？」
「何か面白い事件的なことあった？」
「俺最近ちょっとやばくて、是非話聞いて欲しいんだけど」
「実は足の幽霊に毎晩蹴られて勘弁して欲しいんだけど俺変かな？」
「で、ものは相談なんだけど、今晩泊めてくれない？」
何故だろう、私は不意に、泣きべそ顔になりそうになった。
急いでハンカチを鼻に当て、くしゃみが出そうになったことにした。
ビールを、ジョッキ三分の二まで呷る。
襟元を正し、枝豆をつまむ。
しっかりしろ。俺。
否だ。
あり得ない。
二年前に別れたきり一度も連絡を取っていない元カノの家に「泊めてくれ」なんて。
しかもその理由が「足の幽霊が怖いから」だなんて。
それこそ、俺の精神に異常ありの話だ。
私は考えた。
ビールを飲み、切り干し大根の煮物をつまみ、出し巻きを頬張りながら、どうすべきか考えた。
そして再び、携帯を手に取った。
今度は違う相手にメールを打つ。
すぐに返信があるかどうかは、わからない。
だが、何も手を打たずにいるよりはましだ。
メールを送った先は、熱田氏だった。
だが無論「今晩個人的に泊めてもらえませんか」などとは頼まない。絶対にない。
私が送った文面は以下だった。

・・・・・・

夜分の連絡失礼します。
実は先日の面談以来、私に取り憑いている足の霊の攻撃が激しくなり、毎晩辛い目に遭っています。
つきましては、自宅に戻らずにすむよう、どこかビジネスホテル等で宿泊の手配をお願いできませんでしょうか？
このまま自宅に戻ればまた暴力を受け、心身が危うくなると危惧されますので、宜しくお願い致します。
・・・・・・

私としては行間に『あんたとの面談のせいで被害を被っているんだ』という苦言を呈しているつもりだった。
だがどこまであの熱田氏に通じるのかは、疑問であった。
とにかく送信し、三杯目の焼酎水割りを飲んでいると、数分後に返信が来た。

・・・・・・
お世話になります。熱田です。
この度は霊障の被害に遭ったとのこと。
心痛お察しいたします。
さて、当施設内に宿泊設備はございます。
利用料については、一泊三万円となります。
以上、急ぎご連絡申し上げます。
・・・・・・

「さんま」呟きを途中で止めたため、結果それは青魚の名前となった。
居酒屋の店員が一瞬こちらを見たが、何も追求してはこなかった。
秋刀魚の季節ではないからだろう。
私は茫然と携帯メールの文面を見つめた。
この人たちは。
しばし、酒を飲むこともつまみを食べることも、忘れていた。
この人たちは、この仕事をやってて楽しいんだろうか。
ふとそんなことを思った。
専門職っちゃ専門職なんだろうけど。
十三万に、三万。
いわゆる、ウハウハって奴だな。
私は、その浄霊集団の宿泊施設を使う気にはまったくならなかった。
無料宿泊させろとゴネてみる、という方策も思いついたが、メールでそんなことを言っても埒は開かないだろうし、電話で熱田氏と丁々発止の直接交渉をする気にもなれなかった。
酔いがまわってきているのもあり、そんなことをするには心身共にだるかった。
となれば、またあの部屋に戻らざるを得ないわけだが、そうするとまた足の猛撃を食

らうことは明らかだ。
　私は別の視点から、熱田氏に交渉することにしてみた。

・・・・・・
　宿泊施設についての情報ありがとうございます。
　本日は利用を見合わせることにします。
　ところで、本当に浄霊はできるんでしょうか？
・・・・・・

　返信は一分後にきた。

・・・・・・
　場合によっては、浄霊でなく除霊になります。
・・・・・・

　除霊？　私は目を丸くし、焼酎を飲み、またメールで質問した。

・・・・・・
　浄霊と除霊はどう違うのですか？
・・・・・・
・・・・・・
　浄霊とは、憑いている霊を成仏させることですが、それが不可能な場合は除霊、つまり単に霊を取り祓う、ということになります。
　この場合、再び霊が戻ってきてしまう可能性があります。
・・・・・・
・・・・・・
　除霊になった場合、料金については安くなりますか？
・・・・・・

　返信がない。
　私は苦虫を噛み潰した。
　こんなんで、本当に俺は救われるのか？
　心から苦々しく、そう思った。
　だが返信は数分後、焼酎の湯割りを頼んだ直後に届いた。

・・・・・・
　除霊の場合料金は二割減となります。
　ところで、足からの攻撃が激しくなっているとのこと。
　さぞお困りと存じます。
　お札をご利用になりますか？

・・・・・・

お札。
漫画や TV 番組でしか見たことがなかった。
何か、墨で呪文のようなものが書かれた、短冊様の紙製の神具。

・・・・・・
使いま
・・・・・・

打ちかけて、手が止まる。
一体、幾らだ？

・・・・・・
お札は、料金はかかりますか？
・・・・・・
・・・・・・
お札代は、器具代金の中に含まれます。
・・・・・・

私はつい微笑の顔になった。
一瞬、この浄霊団体が “親切な人たち” に思えてしまったのだ。

・・・・・・
では、利用させていただきます。
本日、受け取る事ができますか？
・・・・・・

はい。
あなた方に浄霊、不可能な場合は除霊を、依頼します。
料金十三万円については、これを承諾します。
そう宣言することであるという自覚のまったく無きまま、私は熱田氏に、メールを送信した。

第 12 話

　熱田氏は、私の居場所を訊ねて来、直接御札を届けると言ってくれた。
「下手にそこから動くと、危ないかも知れないから」
というのが、彼女の意見だった。
　まるでＳＰだな。
　私はそのメールを見ながら少し吹いた。
　足が、私の後をつけ狙っているとでもいうのか。
　私には、足があの部屋から出てくることなどまるで想像もつかなかった。
「足だけとは限りません。他の部分も存在している可能性があります」
　特に異論を唱えたわけではないが、熱田氏は追加メールでそういう説明を寄越した。
　熱田氏が実際にやって来たのは、およそ三十分後だった。
　タクシーを使ったのだろうか。
　その経費も、私の浄霊代の中に含まれているのだろうか。
　そんな質問をする暇など当然なかった。
　熱田氏はカウンターのスツールに腰掛けながら逞しい腕を店員に向かって差し上げ、
「生中」
と注文した。
「こちらが、御札です」
　そして居酒屋のカウンターの上で、彼女は私に、長方形に畳まれた紫色の袱紗を差し出した。
「ああ、これが」
　私は、酒の回った頭なので、さして緊張などしてもいなかったのだが、可能な限り厳粛に受け取ろうとした。
　だがやはり、酔っ払いに触れられたくなかったのかどうか、熱田氏はすぐにまた袱紗を取り上げ、さらさらとそれを開き、中身の白い紙製の御札だけを改めて差し出してきた。
　御札の、表紙というのか、表書きというのか、最初に目に入った面には、私の知らない文字が一文字、筆書きされていた。
　日本語ではない。
　いわゆる “梵字” というものだろうか。
　とにかく、日本の当用漢字でないことは確かだった。
　私は、純粋な物珍しさにとらわれてその字を見つめた。
　字もまた、私を見つめているような気がした。
　何かの呪文、何か霊的な念のこもった文字なのだろうか。

私にはまったく知識がなかった。
これまでの人生で、そのような文字を目にしたこともなかったのだ。
この世に、こんな文字が存在しているのか。
「これを貼る場所なんだけどね」
熱田氏は御札をちらりと見下ろして説明した。
「よかったら……というか、ぜひ、これからお宅へお邪魔させていただきたいのよ」
「え」
私は半眼の目を熱田氏に向けた。
「今から、ですか」
「ええ。突然こんなこと言ってごめんなさい、だけどやはり、実際に部屋の中を見させてもらわないと、御札を効果的に使ってもらうことができないから」
「……はあ」
届いた生中を、熱田氏は威勢よく呷った。
私はぼんやりとそのさまを眺めていた。
その威勢のいい飲みっぷりが、ただこの女性の酒好きさを表すものなのか、それともこれから行う“ひと仕事”のために景気をつけるためのものなのか、わかるはずもなかった。
私のマンションまでタクシーを使ってもらえるのかと若干期待していたが、そうは問屋が卸さないようだった。
熱田氏はコツコツと高らかにヒールを鳴らし、威風堂々という勢いで駅へと向かった。
恐らく浄霊団体から支給されたものと推測されるＩＣカードを改札に通し、私の後からホームへ上がるエスカレーターに乗る。
「足元に気をつけてね」
まるで母親のように、私の背後から注意を促す。
電車は空いていて、私と熱田氏は人一人分の距離を置き並んで座った。
「あれから考えてみたんだけどね」
熱田氏は、電車が動き出して少しすると口火を切った。
「どうも、わからないのよ」
「何がですか」
私は訊ねた。
「正体が、よ」
そう言って熱田氏は、私の方を見た。
「正体？」
私も熱田氏を見た。
「ええ。哺乳霊だということはわかったんだけれど、人間なのか動物なのか、どうしても判断がつかないの」
「そうなんですか」
「いつもなら、初回の照射でほぼ特定できるものなんだけどね」
熱田氏は何事か思いめぐらせるように、顎に手を当てまた正面を向いた。
「照射……あ」

私の脳裏をファミリーレストランでの光景がよぎった。思わずえずきそうになり、慌てて私も正面を向いた。
「あの、セルライトビームでしたっけ」
「熱田スペシウムよ」
熱田氏は私を見ずに答えた。私はハッと硬直し、私もまた熱田氏を見ることができなかった。
タタン、トトン、という電車の音の中、我々は沈黙の時を過ごした。
やがて電車は私の降りるべき駅に、いつも通り何のつまずきもなく到着した。
特段の会話もないまま、我々は降り立ち、改札を抜けた。
すっかり静まり返った町中を数分ほど歩き、見慣れた居住ビルに到着する。
階段を昇り、私は取り出した鍵を回してドアを引いた。

「どうしてこんなことするの？」

突然女の声が聞え、私はハッと顔を上げた。
真っ暗な部屋――暗闇が、目に入る。
誰かいるのか？
「どうしたの？」
熱田氏の声が、背後から聞えた。
「入らないの――何か、気になる？」
職業的な勘というのか、熱田氏は、恐らく彼女には聞えなかっただろう声を私が捕らえたことを推察したようだった。彼女は私の横から首を伸ばして暗い部屋の中を覗きこんだ。
「何か、見えた？」
「い、いえ……」
私は、言うべきなのかどうか、一瞬迷った。幻聴なのかも知れない。
「気配を感じたとか？　何か聞えたとか？」
熱田氏はさらに追及してきた。
「あの……声が」
「声」
熱田氏は、私を見た。
私も熱田氏を見、かすかに頷いた。
「どんな？」
「――女性の声、が」
私は、なんとなく声をひそめて答えた。
熱田氏は、暗い部屋の奥に再度目をやり、しばらく凝視していたが、やがて小首を傾げて
「変ね」
と呟いた。
「何がですか」

　私は訊ねた。
「女性の霊なんて、感じないわ」
「……」

「どうしてこんなことするの？」

　疲弊しきったような、かすれた声。
　声音からは、若い世代――二十代くらいの女と思われる。
　泣きながら訴える声だったのかも知れない、そんな風な、今にも切れてしまいそうにか細い、か弱い声だった。
　私の耳には、判然と届いたのだ。
　私は、顔を横に向けた。
　どこか近所の部屋から聞えたのだろうかと一瞬思ったのだ。

「こんばんは」

　先日、玄関先で逡巡する私に声をかけてきた主婦の姿が浮かんだ。
　だが、違うと思った。
　あの主婦は、少なくとも四十代あたりに見えたし、声質もまったく違う。
　それに第一、近所からの声ならば熱田氏にも感知できたはずだ。
　暗く、静かな部屋からは、もう何も聞えてこなかった。
　私は熱田氏の視線に促され、中に入った。
　灯りをつける。
　日常通りの、自分の部屋だった。

第 13 話

熱田氏は、私の部屋の壁をゆっくりと見回し、天井を見上げ、床を見下ろした。
私はそれを眺めながら、昔バイトしていたコンビニの店長を思い出していた。
清潔好きな女性で、店内の清掃や整理整頓、棚上の商品の並びやフェイスアップに厳しいのはもちろん、学生バイトに対しては私生活においても “きちんと” するようにと、ことあるごとに説教していた。
いわく、
「部屋というのは、いつ誰が来てもいい状態にしておかないといけない」
と。
特に尊敬していたわけでもなかったが、特に嫌いでもなかった相手でもあり、私はなんとなく、その言いつけに対しもっともだと納得して、なんとなく今日まで守っていた。
そうしていてよかったな、と、今思っているわけだ。
今日のように突然、浄霊屋が部屋にやって来ることも、人生においてはあるのだ。
「いないわね」
熱田氏は、また顎に手を当て小首を傾げた。
「いない？」
私は訊いた。
「ええ」
熱田氏はもう一度、部屋の中をゆっくりと見回した。
霊が。
と、いうことか。
「特に、通り道、というわけでもなさそう」
言いながら、壁に向かって掌をかざす。
また “熱田スペシウム” を出しているのか。
私は我知らず、眉をひそめた。
顔をそむける。
気にしないことだ。
熱田氏が、手や腕から何を発射しようと、私には害はないのだ。
むしろ、彼女は私を救うために、それを発射しているのだから、感謝しなければならない。
だが、そうとわかってはいても、私は顔を正面に戻すことができずにいた。
一体、どういう物質がそこから出てきているのだろうか。
よっぽど、“気” というのか、スピリチュアルな、人知の及ばない何か霊的な力が、強く発せられているのだろう。

私は、それによってきっと、足から救い出されるのだ。きっとそうだ。
そういう思いに、精神を集中させた。
きっと、平和と安寧は訪れる。
熱田氏を信じるんだ。
沈黙がしばらく流れた。
私は、そっと顔を熱田氏の方に向け直した。
熱田氏は、じっと天井を見ていた。手はまだ壁に向けている。
私も倣って、天井を見た。
何もない、ただの天井だ。
足は、どこにもいなかった。
「何も、感じないわ」
やがて熱田氏は、ため息まじりに白状した。
「霊的な存在は、ここにはいない」
「そうなんですか」
私は小声で答えた。
もしかしたら、熱田氏が来ているからじゃないのか。
そう思った。
彼女が帰ったら、待ってましたとばかりに足が飛び出てきそうな予感が、した。
「変よね」
熱田氏は、首を小さく横に振った。
「なんにもいないなんて」
「そうなんですか」
私は小声で訊いた。
「だって、どこに行っても大概、何かしらの霊というのは通常、存在しているものなのよ。
それが、まったくなんにも、何の存在も、感じないなんて」
「へえ」
「ここはまるで」
熱田氏は言葉を切り、もういちど私の部屋の中を見回した。
「何かの結界を張られたように、清浄だわ」
「えーっ」
私は目を丸くした。
「清浄、ですか？」
熱田氏に倣って、部屋の中を見回す。
いつも生活している自室だが、天井を改めて観察することなど滅多にはない。
「その足の霊が」
熱田氏は私を見て言った。
「他の霊を寄せ付けずにいるのかも、知れないわね」
「――」
私は返答できずにいた。
「何者なのかしら」

熱田氏は、私を見たままで言った。
「その足って」
「――」
私はやはり答えられずにいた。
足とは、何者か。
知らない。
それが、答えのすべてだった。
「哺乳霊、と私言ったけれど」
熱田氏はまた壁に“遠い目”を向けながら、呟くように言った。
「もしかしたら、そんな平凡なものじゃないのかも」
「――」
哺乳霊、それそのものが私にとっては“非凡”に思えたのだが、私は黙っていた。
「他の霊を寄せ付けない、そんな強大なパワーの持ち主といえば」
「――何、ですか」
「それより上の存在」
「――上」
「つまり、神」
「か」
「或いは、仏」
「――」
私の唇は“ほ”の形を作ったが、声にならなかった。
は？　神？　仏？
いや待ってくださいよ。
冗談でしょう？
あいつは、私を夜ごと毎晩、ごっつごっつ蹴っとばしていたんですよ？
神とか仏とかが、そんなことしますか普通？
それどころか最近じゃ、ほんと浄霊に逆ギレしてる状況で。毎晩ほんと。
あんなの、神でも仏でもないすよ。
むしろ悪魔ですよ。悪霊。
ごたく並べてないで、とっとと追っ払ってもらえますか。
私の中のクレーマーが、口角泡を飛ばして怒鳴り散らしていた。
そして同時に、
はい、はい、ただ今直ぐに対処致しますので、今しばらくお待ちください、は、まことにお待たせしまして、申し訳ありません。
と私自身の声がそれに対し平身低頭で平謝りしていた。
職業病だろう。
こっちは金払ってるんだ。
脳内クレーマーは尚も言い募ったが、私はそれに対し自分できっぱりと否定した。
いえ、お客様にはまだご清算いただいておりません。
「まあ、とにかくお札をどこに貼るか、決めてしまわないとね」

　熱田氏のため息交じりの声に、私は頬をはたかれた思いで現実に戻った。
「貸して」
　私に向かって手を差し出す。
　私は約二秒ほど、ぼけーとそのふくよかな手を見つめ、
「お札」
と、熱田氏の超ピンク色の唇が目的語を告げるのを聞き慌てて鞄からそれを出した。
　熱田氏はお札を手のひらに載せ、鼻先で左手の中指と人差し指を並べて立て、ぶつぶつと何かお経のようなものを唱えながら、部屋の中央でゆっくりと回転した。
　そして
「ここね」
と、押入れの襖の左隣、床から約１．５メートルほどの高さにお札を宛がった。
　お札の裏面というのか、筆書き文字の書かれていない方の面から、指先でぴーっとテープ状のものを引き剥がす。
　そうして目星をつけた位置に、

　ぱん

とお札を一挙動で貼りつけ、上下の端を指先で心持ち整え、

　ぱん

と合掌し、経を小さく唱えた。
　私も我知らず合掌し頭を垂れていた。
　こんな、あっさりしたやり方でいいのか。両面テープで。
　そんな想いが胸中にないではなかったが、なにしろ依頼してしまったのだから、後は専門業者の仕事に口出し無用だと思い、何も言わずにいた。
「そうね。これで、様子を見てちょうだい」
　熱田氏は振り向き、久しぶりに見せる微笑で私に言った。
「はい」
　私は神妙に頷いた。
「それから次回、霊と――まだ霊なのかどうかわからないけれど、直接対話を試みることにするわ」
「直接」私は顔を上げた。「足と、ですか」
「ええ」
　熱田氏は頷いた。顎の下の脂肪が三日月型に寄り集まった。
「その道の専門家がいるの。あなたと最初に電話で話した男の子よ。今度紹介するわね」
　ニッコリ笑う。
　最初に電話で、と言われてもすぐには思いだせなかった。
　ずっと後になってから、言葉の歯切れの悪い、やる気のなさそうな電話対応を思いだした次第だ。

「彼は霊媒体質でね」
　熱田氏は説明した。
「その “足” を、彼に取り憑かせて、代弁させるの」
「へえー」
　私は心底感嘆の声を挙げた。
　足と、対話。
　私がかつて失敗した芸当だ。
　なるほど、霊媒体質という専門能力が、それには必要だったのだ。
　それならば、私が失敗しても致し方ない。
　妙に納得がいき、心のどこかで満足を覚えていた。
　それじゃ無理もないよな。
　俺は、普通の人間なんだから。
　何も足と対話できなくても、俺が悪いわけじゃない。
　ただ、霊媒体質というものに恵まれなかっただけなんだから。
「ただ、もしかしたら」
　熱田氏は再び眉を曇らせた。
「生き霊、なのかも知れないわね、“足” って」
「生き霊？」
　私もまた目を丸くした。
「足が？」
「ええ――生き霊だと、霊媒にも代弁が難しいのよ」
「へえー」
「まあそうだとすると今度は、あなたに関わりのある人間だってことに限定できるから、却って対処が簡単になっていいけれどね」
　またニッコリとする。
　そういうものか。
　私は茫然と、数度頷いた。
　生き霊。
　私と関わりのある、誰か。
　言い換えれば、毎夜蹴り飛ばしたくなるほど、私に何かしら悪意を抱いている、相手。
　巡らせたくないものではあったが、いきおい私の中でそれに当てはまりそうな人間たちの相貌が、巡り始めていた。

第 14 話

次回の “セッション” の予約を取り付けた後、熱田氏は帰っていった。
一人残された部屋で、私は自分の内部に緊張が高まりゆくのをひしひしと感じた。
足は、今夜も出るのか。
それとも、お札によって封印され、姿を現さないのか。
私はテレビをつけた。
バラエティ番組を放送していたが、そのまま風呂に向かった。
入浴後、押入れから布団を出し、床を延べる。
テレビの中は、政治や経済について議論する堅い番組に変わっていた。
どちらにしても、私は真面目に観る気にならなかった。
ただ、何か音が出ていてくれればよかったのだ。
とはいえ、近所への影響も考え、音量は小さめにしておいた。
布団に入る前、それをさらに絞り、電灯も常夜灯をつけたままにして、緊張しながら床に就いた。

「その会合の席で大臣はこう仰ってましたね」

漫画のように、布団から顔だけ覗かせてテレビを見る。
評論家がテーブル上に身を乗り出すようにして熱弁を振るっている。
「これは国民に対する裏切りといっても過言ではないと、私はそう思いますよ」
「違います。それは私の本意ではない、ただ私はもっときちんとした制度として法的に確立させた上でないと」
「とにかく大臣のこの発言を聞いた後では、とても投資に資産を回す気にはなれない」
いつものことだが、議論は劇的に白熱しているようだ。
私は、こういった丁々発止の番組というのが本来あまり好きではないのだが、今日はなんだか、熱心にとまではいかずとも、なんとなく、ぼんやりと、彼らの言葉に耳を傾けて、そして眠りに就きたいと思った。
「それは、言葉は悪いが勘ぐり過ぎ、早とちりというものであってですね」
「いや、誰もがそう思ってますよ。なにも私個人だけの捉え方じゃない」
足は、姿を見せない。
やはり、お札効果が出ているのだろうか。
「御札効果」……なんだか、経済用語に似ているな……

私は、だんだん眠りに堕ちていきつつあるようだった。
「この円安の状況下だからこそ」
「ちょっと話を聞いてもらえますか」
「では、ここで一旦ＣＭです」
瞼の裏に映る色が、変わった。
若いアイドル歌手の歌うＣＭソングが流れる。
政治家や評論家の親父たちの、しわがれた怒声から、うって変わって明るい声。
ああ、やっぱこっちの方が、心地好いな……

「自分に自信がない。まったくもう、驚くほど、自分がちっぽけに見える。人と対峙するたびに、どんどん自分が嫌になっていく」

ぼそぼそと喋る、男の声。
何のＣＭだろう……またアイドルの声から一転、張りのない声だな。
なんつうか、うだつの上がらない声、とでもいうのか……
「どうして俺は駄目なんだ。何をやっても。何を言っても。何を思っても。何を見ても。何を聞いても。すべて、俺じゃ駄目なんだ。きっと他の者なら、そう例えば、あいつやらあいつやら、あいつだったらきっとそれはうまく行くんだ。人からも評価されるんだ。だが俺じゃ駄目だ。俺じゃまったく何の成果も得られない。リスクばかりで、リターンなし。ノーリターンだ。誰も、興味も関心もまったく示しやしない」
男の声はぼそぼそと続いた。
長いＣＭだな……それとももう番組に戻ったのか……
「何か、俺に制御できるものを、大急ぎで探さなきゃいけない。俺にコントロールできるもの。俺に、制覇できるもの。支配できるもの。それが、あいつだった」
あいつ……
つまり、俺のことか……
ハッとした。
目を見開いた。

布団の外に、足がいた。

爪先から、足首の十センチ上辺りまでが、私の鼻先数センチのところに見えていた。
布団が、いや部屋が、いや世界が、異様に揺らめいた。
だが不思議なことに、そこに見えている足は、足だけは、揺らめかないのだ。
足は確固として、そこに存在していた。
そうして足は、確固としてそこに存在したまま、私を蹴り始めた。
そうだ。
そもそも、そうだった。
諸兄は覚えているだろうか、この足が、布団の存在にかまわず、私の腰を直截的に蹴

り飛ばしていたことを。
　ああ、今にしてみれば、懐かしい日々だ。
　あの頃は、平和だった。
　というのもおかしな話だが、まあ今よりは、平和だった。
　何が平和って、蹴られ方がだ。
　あの頃の足の攻撃は、痛くなかったのだ。
　まるでじゃれついてきているかのような、ふざけ半分の、遊び心からの蹴り、そんな感じだった。
　今のように、全体重（恐らく）をかけて、明らかに敵意をもって、激痛の走る蹴り方などしてこなかった。
　私は布団の存在に関わらず、直截的に、頭のてっぺんから足先まで、激しく蹴りつけられた。
　布団の存在に関わらず――そしてお札の存在に関わらず。

第 15 話

　その理不尽さ加減は、どういうことなのだろう。
　私がそのことに気づいたのは、熱田氏から
「どうして、逃げなかったの？」
と質問された時だった。
　そうだ。
　言われてみれば、確かにそうだ。
　熱田氏ご指摘の通りだ。
　私は、どうして今まで、足に攻撃されるがままになっていたのだろう。
　答えの一部はすぐに出てきた。
　最初の頃の“じゃれつき蹴り”の余波だ。
　私の中でそれは、その現象は“逃げるほどのこと”では、ないことになっているのだ。
　だが、私の中に理由として思いつくものが他にもあった。
　恐怖だ。
　私は、恐くて動けなかった。
　体が、萎縮していたのだ。
　逃げようとすれば、きっと足に殺されるに違いない。
　そんな風に、無意識の内に決め付けていたのだ。
　今にして思えば、痛くはあるが翌日になってみれば物理的な、リアルな傷などまったく受けていないのだから、多分、命に別状もないのに違いない。
　思い切ってがばっと立ち上がり――もしかすると足は一瞬驚いてひるむかも知れないし――間髪を入れず部屋から飛び出してしまえば、あるいは逃げられたのではないか。
　まあ、夜の夜中だから、飛び出した後どうするのか、という問題も残ってはいる。
　では今夜から、夜寝るときは財布と携帯を傍らに用意して床に就くことにした方がいいのかも知れない。
　逃走資金と、通信媒体を持って。
「まあ、ともかく無事で何よりだわ」熱田氏は元気溌剌な声を張り上げ、ニッコリと笑った。「あ、それでこちらが、先日お話しした霊媒体質の子。森下君っていうの」
　そう言って、彼女の左斜め後ろに背後霊のごとく佇んでいる、眼鏡の青年を手で示す。
「あ、どうも。森下です」
　その眼鏡の男はぼそぼそと自己紹介をし、約二センチほど会釈した。
　私はプラス三センチ、つまり五センチほどの会釈を返した。
　場所は、駅の中だ。

会社帰りの人間が急ぎ足で通り過ぎてゆく。
我々は改札を入ってすぐの円柱の傍で落ち合ったのだ。
そこから三人連れ立って、私の住まいに向かうことになっていた。
「ね、この時点で、何か見える？」
熱田氏は、森下氏に訊ねた。
私は一瞬、彼女が “エセ浄霊屋” なのではないか、と思った。
熱田スペシウムなど、本当は出せないのではないのか。
本当は人に頼らなければ、生き霊も死に霊も見えやしないのでは。
「……」
森下氏は、眼鏡越しにじっと私を見た。
かなり度数の強そうなレンズの向こうの目は、くっきりとした二重だが何か眠そうな、平たく言えば垂れた目だった。
などと思っていると、突如森下氏は眉をひそめた。
私は腋下に汗を掻いた。
思考が読まれたのか。
「何か、」
言いかけて森下氏は言葉を詰まらせた。
だが私を見る眼差しは動かない。
その内彼は、ゆっくりと、首を傾げはじめた。
右に傾げ、次に左に傾げる。
ゆっくりと。
「いるの？」
熱田氏も私を探るように見ながら、森下氏に訊ねた。
私は、さり気なく周囲を見回した。
二人の男女に観察されている、くたびれたサラリーマンという構図は、道行く人々の好奇の目を止めたりしないだろうか。
だが、会社帰りの人々は他に考えなければならないことがそれぞれにあるようで、私たちはまったく、人の目を引くことなどなかった。
「なんか」森下氏は復唱した。「んー……いる、というか、あります、ね」
「ある？」
熱田氏と私の声が見事にシンクロした。
「はぇ」森下氏は「はあ」と「はい」の中間語で返事をし、自分の頭を右手の人差し指でつついた。「大脳辺縁系が、妙にびくびくしてます」
私は、何も言えなかった。
ただ、黒目を左右にきょときょと、数回往復させただけだった。
本音を言えば、
「はあ？」
と、思い切り顔をしかめて訊きたかったのだが、抑制した。
「まあ」熱田氏は、森下氏の言っていることの意味がわかるのか、目を丸くして少し身をそらせた。「つまり？」いや、やはり彼女にもわからないようだった。

「大脳辺縁系って、平たく言えば喜怒哀楽をつかさどる部分なんですけど」森下氏は熱田氏の方に向き直って、説明を始めた。「そこが、妙に抑えつけられてるっぽいです」
「つまり、感情が？」
　熱田氏が訊きかえす。
「はぇ」
「理性で感情を抑えてるってこと？」
「というよりも、何か理不尽に、無理くり抑え付けられてて、苦しがってるような感じというか」
「脳みそが？」
　ついに私も言葉を差し挟んだ――多少、噴出しつつ。
　霊媒体質というのは、あれか、要するに人の脳みそが透けて見える体質ということなのか。
　なるほどそんな体質ならば私には、断じて備わっていない。
　なるほどそんな能力が必要なのであれば、私が足との対話に失敗したのも、ものすごく当然至極ということになる。
　なにしろ脳みそが見えなきゃ、足と対話できないわけだ。
　足との対話なんか、土台できるわきゃねえということだ。
　そう、私は、爆笑を堪えていた。
　こいつら、何なんだ。
　十三万とかふんだくりやがって。まだ、払ってはいないが。
　大脳辺縁系だって？
　浄霊の話はどこにいったんだ？
　何が熱田スペシウムだ。
　ガキ相手にしてるつもりか。
　ガキ相手に十三万ぼったくる気か。
　こいつら、穢れてやがる。
「まずいわね」
　出し抜けに熱田氏はそう言うと、二の腕を顔の前に立てた。
　ハッと身構えたが、遅かった。
　私はまたしても、真正面から“熱田スペシウム”を食らってしまい、呼吸も困難になるほどの気持ち悪さに襲われた。
　思わず前のめりになったが、森下氏が不自然に見えない挙動で私の体を横から支え、私は“床でのたうちまわりたい”という欲求を実行に移すことができなかった。
　つまり自分の希望とは裏腹に直立したまま、熱田スペシウムの照射を受け続けなければならなかったのだ。
　ごめんなさい。
　子供のように心の中で泣き叫んだ。
　疑ったりしてごめんなさい。
　はい、確かに出てます、熱田スペシウム。
　私が悪かったです。

　もう、疑ったり馬鹿にしたり、しません。
　だから、許してください。
　もう、やめてください。
「今はどうなの？　　その、大脳辺縁系の状態は」
「変わらないです」熱田氏の問いに、森下氏は即答した。「妙ですが……情動の変化は、見られないですね」
「そう」
　二人の声は、どこか遠くから聞えてくるようだった。

「あっくん、やめて」

　か細い女の声が、聞えた。

「どうしてこんなことするの？」

　この、声。
　私は、ぐるぐる回る視界の中、かろうじて思い出した。
　あのときの、声だ。
　熱田氏がうちに来た時、ドアを開けた瞬間聞えた、死にそうな女の声。
　だがその時、気持ち悪さがいよいよピークに達し、私はぎゅっと目を瞑った。
　瞑る前に見えたのは、眠そうだった二重の垂れ目を最大限に見開き、驚愕の面持ちで私を見る森下氏の顔だった。

第 16 話

「どうしたの？」
　熱田氏の声が聞える。
「……いました」
　森下氏が、消え入りそうな声で、かろうじてという感じで答える。
「いた？　　何が？」
　熱田氏が、被せるように再度訊く。
　やはりこの女は、エセ浄霊屋だ。
　私は目を強く閉じたまま思った。
　何が？　　って。
　霊が、に決まってるじゃないか。
　だって森下氏って、霊媒なんだろ？
　そういう風に紹介したの、あんた自身じゃねえか。
「女の人……が」
「女の人」熱田氏は復唱し、それから矢庭に私の腕を握り締め、ぐいっと強く引いた。「ここに？」
　ここって。
　俺はもはや、場所扱いかよおばさん。
　物扱いですらなく。
　腕を振りほどく力も、残っていなかった。
「ＤＶ」森下氏は言葉を継いだ。「受けてた、もしくは受けている、みたいです……ね」
　抑揚のない、声。
　まるで、その言葉を発することが、罪を犯すことであるかのような、できれば言及を避けたいと願っている、そんな風情の、声。
　私は、そっと瞼を持ち上げてみた。
　私の腕を掴んだまま、私には目もくれず森下氏を振り向いている、熱田氏の後頭部。
　女性向けかつらのメーカー名が、ふと脳裏をよぎる。
　その向こうで、怯えた眼差しをこちらに向けている、眼鏡の霊媒男。
　今私が熱田氏の後頭部について抱いた感想も、もしかしたらこの男には “見えた” のだろうか。
　だが特に、彼の表情に変化は見られなかった。
　くすっと笑うことも、失笑も苦笑も、なかった。
　駅の中を通り過ぎてゆく人々は、相変わらず私たちに目もくれない。

実は私たち三人自体、他の人間たちには“見えない存在”なのかも知れない。
「ＤＶ？　ドメスティック・バイオレンス？」
熱田氏が、総称を口にする。
「……はぇ」臆病な眼鏡男は小声で答える。「顔中、痣だらけの」森下氏は、かすれた風邪のような声で説明した。「女の人の顔が」
「それは、生き霊？」熱田氏は続けて問うた。「私には、何も見えなかったんだけど」
「わかりません、俺もほんの一瞬だけ見えたんで」森下氏はうつむきながら答えた。「でもそれが見えた瞬間、この人の大脳辺縁系が、抑制を解かれたというか」ちら、と私を上目遣いで見る。
熱田氏が、私に振り向く。
超ピンクの唇が、デフォルメされたマンボウのようにすぼめられていた。
「そういえば、先日おうかがいした時に、女の人の声が聞えたって言ってたわよね」
私は小さくうなずいた。
涙が出そうになる。
ごめんなさい。
あなたの後頭部を見て、かつらメーカーの名前なんか連想したりして、ごめんなさい。
理由はわからないが、この女性には抗えない、逆らえない、という想いが、頑強な枷となり私を支配していた。
そう、私は支配され、抑圧されていた。
この、熱田氏に――もっといえば、熱田氏の放つ“熱田スペシウム”に。
一体、熱田スペシウムというのは何なのだろう。
「今も、もしかして？」
「はい」私は、すっかり体力を消耗していたにも関わらず、大人の男らしく、明瞭な発音で返答した。「女の人の声、あの時と同じ声が、聞えました」
「その声に、心当たりはないの？」
「ありません」首を振る。
「足に、蹴られてた人……ですかね」森下氏が、推測を口にした。「その部屋に、昔住んでたとか」
私は、半分だけ残った魂でもって森下氏を見、そしてさらに半分だけ残った意識のもとで、理解した。
あいつ……女性を、蹴ったりしていたのか。
怪しからん奴だな。
「それで、蹴ってた方も蹴られてた方も両方、今この人に取り憑いてるってこと？」熱田氏が訊く。
「……すかね」森下氏の声は小さくなる。
私は、眉をひそめた。
「つまり」熱田氏はまた森下氏に振り向き、話をまとめ出した。「今君が見た女の人は、前にこの人のお宅にうかがった時聞こえたという声の主。でも霊的な存在としては感知できなかった、そして痣だらけの顔。この人は足に顔や体をめった蹴りされた、けど痣にはならなかった」

「代替受害、すかね」
「あるいは」熱田氏はもう一度私の顔を見ながら超ピンク色の唇で言った。「その女の人がこの人を蹴ったのかしら」
「――」
　ごつごつして太い筋の盛り上がった足の姿が浮かぶ。
「あっくん、やめて」
　今にもこと切れそうな、か細い声。
　非整合性、という単語が光のようによぎる。
　いや、もしかすると女性であってもそんな足であんな猛撃を喰らわす人もいるのかも知れないが、あのか細い声とあの蹴りとが同一人物のものであるとはとても考え難い。
「そんな馬鹿な、って言いたそうね」熱田氏は私を見たままニヤリと笑った。
　私は返事をする力も頷く力もなくただ茫然と立ちすくんでいた。
「じゃあ、ともかくその部屋に、行ってみましょう」
　私たちは、ようやくホームへと向かいはじめた。
　ついに足と、対話できるのだろうか。
　森下氏を介して。

◇◆◇

　部屋のドアを開ける。
　今日は、何も聞えてこなかった。
「いる？」
「いや」
　熱田氏が短く問い、森下氏が短く答える。
「え」しかし森下氏のリアクションには、まだ続きがあった。「ここ、って……」
　熱田氏がうなずく。「きれいでしょ」
　私には、専門家（エセでないと仮定して）たちの話の内容は正確にはわからなかったが、推察するに、足の霊だの女の霊だの、他の地縛霊だのが何もいないという、先日熱田氏が言っていたのと同じことなのだろう。
　きれいでしょ、というのが必ずしも、私の掃除がゆきとどいている、という意味でないことだけは確かだった。
　私たちはリビングに入った。
「あのね」出し抜けに熱田氏が私の箪笥に近づいてゆき、その上に置いてあったものを手に取った。「これを、貸して欲しいんだけど。いいかしら」
　振り向いた彼女が手にしていたのは、私が前に買ってきたコウロだった。
　足を成仏させんと試みるため、会社帰りに仏壇屋で買ってきた、線香を立てる器具だ。
「あ、どうぞ」私は特段感銘を受けるでもなく、軽くうなずいた。
「ありがとう」熱田氏はニッコリと笑う。「前におうかがいした時から、いい香炉だなーと思って、目をつけてたのよ」

そうなのか。
私には理解の及ばない“世界”の話ということになるのだろうが、専門家に――エセでないとして――所有物を褒められるというのは、やはり嬉しいような、くすぐったいような気持ちにさせた。
熱田氏はハンドバッグから、お茶の葉のような、かりかりと乾燥した草の入った袋を取り出し、その草を、何回かに分けて香炉の中につまみ入れた。
香炉の中に入っていた灰は、足の成仏に失敗した後、処分してあった。
その後は文字通り、宝の持ち腐れという状態だったのだ。
熱田氏は、香炉をリビングのほぼど真ん中の床の上に、両手で大切そうに置いた。
我々三人は、それを取り囲む形で床の上に正座した。
正座は好きではないが、とても胡坐を掻く雰囲気ではなかった。
熱田氏は続いて、ハンドバッグから蝋燭と、それに点火するための器具を取り出した。
チャッカマンだった。
私は不躾にも、口を少し開けてその器具を凝視してしまった。
熱田氏は特に表情を変えることなく、コチ、コチ、と二回トリガーを押して点火し、蝋燭にその炎を移した。
蝋燭は香炉の中に立てられ、チャッカマンは熱田氏のハンドバッグの中に収められた。
そんなんで、いいのか。
私の脳裏にそういった問いがよぎったが、そんなんで、いいのだろうと思うことにした。
なにしろ専門家のやることだから――エセでないとして――
「それでは、始めましょう」熱田氏が、別人のように静かな声で宣言した。
チャッカマンと交代で取り出されたらしい長い数珠が、そのふくよかな手に握られていた。
彼女はその数珠を右手にぐるぐると二重巻きして合掌し、両手をすり合わせた。
カリカリカリ、と、数珠球が心地よい音を立てる。
森下氏が、ささやくように経を唱え始めた。
彼の手に数珠はなかったが、その両手の指は、彼のやる気のない喋り方とうって変わって、ぴしりとまっすぐに伸ばされ、ぴったりと合わせられていた。
見る者の背筋を、思わずしゃんと伸ばさせるような、見事な合掌、というか綺麗な合掌だった。
無論私も、うなだれて合掌した。
だが目は閉じず、薄目を開けて香炉から立ち上る蝋燭の炎のゆらめきを見つめていた。
足は、出てくるのか？
森下氏の口を借りて、ついに奴が話し出すのか？
心臓が、文字通りばくばくと鳴っていた。

「あっくん、やめて」

私は顔を上げ、森下氏を見た。

　彼は眉をしかめ、口を引き歪め、苦しそうに、悲しそうに、か細い声で
「痛いよ……あっくん」
　そう言った。
　ついに“それ”は、現実世界で語りだしたのだ。

第 17 話

「やめて……痛いよ」かすれた声で、彼――つまり森下氏――は続けた。
　これが、足の声、なのか？
　私は内心でそう問うた直後に、違う、と内心で答えを出した。
　これは、あの女性の声だ。
　いや、声そのものは森下氏の声だが、今彼の口から出てくる言葉は恐らく、私が聞いた正体不明の女性のものなのだろうと思われた。
　かすれ、疲弊し、最後の力を振り絞るかのように細くはかなげな、声。
　今にも死にそうな、若い女性の声。
　私を蹴り、踏みつけたあの暴虐の塊である足の声とは、とても思えない。
「大丈夫」熱田氏が穏やかな声で話しかけた。「あなたに、危害は加えないわ。安心して」
　森下氏はうつむき、目を閉じていた。
　唇は少し開き、細かく震えていた。
「ほら。もう、痛くないでしょ？」熱田氏は言いながら、ゆっくりと右腕を体の前に立てようとした。
　私は思わず、ハッと息を呑んだ。
　熱田スペシウムだ。
　熱田氏はちらりと私を見たが、構わず腕を持ち上げ、森下氏に向かって “照射” を始めた。
　私は目をしばたたかせ――何も、本当に “光線” が出ているのが見えるわけではないのでそんなリアクションをする必要もないのだが、そうせずにはいられなかった――、森下氏が床にのたうち回って苦しむさまを想像した。
　だが私の思惑は外れた。
　熱田スペシウムを当てられた森下氏――というか恐らく、今彼に乗りうつっている女性の霊――は、目を閉じたまま、その面に微笑を浮かべたのだ。「あったかい……」あまつさえ、彼女はごく小さな声で、そのように呟いた。
　ええー。
　私は思わず、声に出さずに口元だけで驚愕の言葉を発した。
　あったかい？
　熱田スペシウムが？
　え、気分、悪くならないですか？
「気持ちいい……」女性の霊は、また呟いた。
　どういうことだ？

熱田氏は人によって、照射する光線の種類を変えているのか？
そうだとしたら、不公平じゃないか。
俺にはあんなにけったくそ悪い思いさせた癖に、なんでこの女には気持ちいい光線を当ててんだよ。
まじ種類変えやがって、ドリンクバーか。光線バーか。
金返せ。光線ババー。
無論それは私の心の中だけで叫ばれたものだったが、私は小学生のように唇をとがらせ、眉をしかめていた。
納得いかねえ。
「少し、お話聞かせてもらえるかしら」熱田氏は、熱田スペシウム体勢のまま話しかけた。
「……」森下氏は微笑を閉ざし、少しの間うつむいて無言でいたが、やがて「はい……」と、やはり小さな声で答えた。
「あなたは今、どこにいるの？」熱田氏は、質問した。
「マンションの……部屋です」女は答えた。
私はうなずいた。
そんなの、わかりきってるじゃないか。
ここは私のマンションの部屋の中だ。
「あなたはいつから、そのマンションの部屋にいるの？」
「……五年前、から」
私は目を天井に向けた。
私がこのマンションに住み始めたのは何年前からだったか。
少なくとも、五年より最近から、ということなのだろう。
ええと、五年前というと……
「誰かと、一緒に住んでいたの？」熱田氏のさらなる質問に、私の考察は断ち切られた。
「……」女はなかなか返答しなかった。「……いいえ、ずっと一人……です」
「一人暮らし、しているのね」熱田氏は確認し、それからしばらく、森下氏を見つめていた。
ずっと、熱田スペシウムは照射され続けているようだった。
森下氏の方も無言で、固まったかのように微動だにせず、うつむき続けていた。
「あっくん、というのは」熱田氏は、穏やかな声で質問を再開した。
森下氏の肩が、ぴくりと小さく動いた。
「恋人さん？」熱田氏は小首をかしげた。
「……」森下氏は顔を真下に向け、唇を噛んだ。
“あっくん” について、よほど語りたくないのだろう。
さぞかし、その男からひどい暴力を受け続けていたのに違いない。
私は女性が、気の毒になった。
そういえば、この女性、名はなんというのだろう？
「大丈夫よ」熱田氏は囁くように言葉を続けた。「この光が出ている間は、あなたに危害が加えられることはないから」

「……」森下氏はなおも唇を噛んで黙っていたが、ゆっくりと顔を上げ、元のうつむき角度に戻したあと、小さくうなずいた。「あっくんは……元彼……です」
「もとかれ」熱田氏は復唱した。
　棒読みというかオウム返しというか、この人“元カレ”という言葉の意味、知らないんじゃないかと一瞬思わせるような口ぶりだった。
「あっくんは、あなたに暴力を振るっていたの？」熱田氏は質問を続けた。
　森下氏は、目を閉じたまま、くしゃっと顔をゆがめた。
「大丈夫」再び熱田氏が囁く。「大丈夫だから。私があなたを、守っているから」
　そういえば、足はまったく姿を見せない。
　あっくん――
　私は不謹慎にも、笑いを洩らしそうになった。
　あいつ、「あっくん」って名前だったのか。
　今度私の腰を蹴りにきたら、言ってやろうか。
「あっくん、やめて。痛いよ」
って――
　私はぎゅっと目を瞑り、首を振った。
　ばかな！
　この女性の気持ちを考えろ。
　不謹慎にもほどがある。
　しゃれにならない。
　それはともかく、足がこの場に姿を見せずにいるということは、今熱田氏が、熱田スペシウムによって奴の出現を封じ込めているからなのかと、私は考えを軌道修正した。
　私にとってそうであるのと同様、足にとっても、あの光線は気分の悪いものなのだろうか。
　もしかしたら、男にとっては害になるもので、女にとってはよいものであるとか、そんな性質をもつものなのか。
「私は……あっくんに、何度か殺されかけました」森下氏は静かに話しはじめた。「何かのきっかけで……突然、何かが取り憑いたように人が変わって、狂ったように暴力を振るいだすんです」
「きっかけとは？」熱田氏が、やはり静かに質問する。
「たぶん……嫉妬、だと」
「嫉妬」熱田氏は、女の答えを復唱した。
「はい」
　森下氏は「はぇ」ではなくはっきり「はい」と答えた。
　そのことからも、今話しているのは彼本体ではなく女の霊なのだと推察された。
「あっくんの、私に対する独占欲は……普通じゃなかったと思います」
「そう」熱田氏は超ピンクの唇をすぼめて森下氏を見つめながらうなずいた。「例えば他の男性と、話すだけでも怒るとか？」
「はい」森下氏もこくんとうなずいた。「実の兄と、電話で長話した後も……殴られたことがあります」

「まあ……」熱田氏は、眉をひそめた。彼女にしては珍しい表情だった。「殴られた？」
「はい」
「蹴られたことは？」
　あ。
　私は、顔を上げた。
　核心を突いた、という思いがよぎった。
　そうだ。あっくんは、蹴り専門の人のはずだ。
「……」森下氏は、少し唇を開いたまましばらく考え、「……たまに」と答えた。
「たまに」熱田氏はまた復唱した。
　たまに？
　私も心の中で問い返した。
　いつもじゃなくて？

第 18 話

「あっくんは」熱田氏は質問を続けた。「今も、あなたを傷つけ続けているの？」
「……」森下氏は、また顔をくしゃっとしかめた。
　あたかも、今まさにあっくんに殴られたかのような表情だ。
「今もぶたれたり、しているのね」熱田氏は声をひそめて確認した。
「――いえ」森下氏はかすかに首を振り言葉を返した。「今は、もう……」
「もう、ぶたれていない」
「はい……でも、時々夢を見たり、します……」
「そう」熱田氏は手に持った数珠を、かりり、と両の掌に挟んで擦り合わせた。「今もそういう状態なのかも知れないわね。誰かが、助けに来てくれたの？」更に訊く。
　突然、森下氏は両手で顔を覆い、俯いたまま肩を震わせ始めた。
　女が泣く時のようなポーズだ。
　ということはつまり、彼に取り憑いている女が泣き出したのだろう。
　熱田氏は熱田スペシウムを当て続けながら答えを待っていた。
「兄さんが」やがて森下氏は震える声で言った。「止めてくれました」
「兄さん……お兄さん」熱田氏は復唱して言った。「お兄さんが、止めてくれた」
「――」森下氏は顔を覆ったまま肩を震わせて小さく頷いた。
　熱田氏は、震える森下氏を見下ろし、しばらくじっと見ていた。
　森下氏はただ震えて泣くばかりだった。
「お兄さんは」やがて熱田氏が言葉をつないだ。「どう、なったの？」
　私の脳裏にも、森下氏が次にどう返答するのか、予測がついた。
「……私の、代わりに……あっくんに……」森下氏の声はもはや声とならず、ため息を洩らすように苦しげな囁きとなった。
　熱田氏はまたしばらく森下氏を見下ろしていた。
「あっくんは」やがて、ゆっくりと彼女は言った。「あなたのお兄さんを、手にかけてしまったのね」
「違うんです」森下氏は震えながら、なおも顔を両手に埋めたまま、金切り声に近いほど上ずった声で言った。「私の代わりに、兄さんは」
　熱田氏の、熱田スペシウムの腕が一瞬ぐらりと傾いたように、私には見えた。
「あっくんの中に、入ったんです」
　沈黙が、部屋を占領した。
　誰も、何も言わなかった。
　熱田氏は、傾いた腕を――そこからまだ出つづけているのであれば、熱田スペシウム

を――森下氏に当て続け、私は機嫌のいい赤ん坊の口ぐらいの大きさに口を開け、森下氏は両手で顔を覆いつくし、皆が黙っていた。
「あっくんの中に、入った」
　発するべき言葉はそれに間違いないし、私の脳裏にはそう復唱する熱田氏の声が既に聞えていた。
　だが実際のところ、それは発せられておらず、熱田氏は口を閉ざしたまま森下氏を見つめていた。
　それを見て私も、ぽっかりと開けていた口を閉ざした次第だった。
「どうやって？」
　やっと、発せられた熱田氏の言葉は、そういう質問の言葉だった。
「……私の、力で」森下氏は静かに答えた。
「あなたの、力で」熱田氏が復唱する。
「力」無意識のうちに、私自身も呟いていた。
「私の特殊な力を使って……兄はあっくんの中に入り、彼を止めました」
　森下氏の声は低くなり、冷静さを取り戻したようだった。
　私は衝動的に、自分の周囲を見回した。
　右を。
　左を。
　後ろを。
　もう一度左から、後ろを。
　念のために、真上を。
　その姿は、どこにも見えなかった。
　だが私には、その存在が、目の前の熱田氏や森下氏よりはるかに鮮明に、感じ取られていた。

　足だ。

　足が、今も私を見ている。
　足が、今もここに、いる。
　存在している。
「お兄さんは、あっくんの身体の中に入って、あっくんのあなたに対する暴力を止めた。そういうこと？」熱田氏はきょろきょろと辺りを見回す私には目もくれず、確認の質問をした。
「はい」森下氏は今度は深く頷いた。
「あなたの代わりに、と言ったわね？」また熱田氏は、確認の質問をした。
「はい」森下氏は再度、頷いた。
「本来ならあなたが、あっくんの身体の中に入るはずだったの？」
「私は……」森下氏は言い淀んだ。「私は、あっくんから逃げるべきだったんです……でもできなかった、私が、弱いせいで……だから兄さんが、最後の手段だ、と言って……」

会話はそこでまた途切れた。
「ところで」やがて熱田氏は、話を続けた。「あなた自身は、生きているの？」
森下氏が久しぶりに顔を正面に向け、熱田氏を見た。
薄ぼんやりとした、眠そうな顔だった。
「……はい」小さく、頷く。
「お名前は？　ああごめんなさい、私は熱田といいます」熱田氏はニッコリと笑って自己紹介をした。
私は、自分も名乗るべきなのかと考え、森下氏と熱田氏を交互に見た。
森下氏は、やはり私には目もくれず、熱田氏に向かってかすかに会釈をした。「私は……里野あきみといいます」
「さとの、あきみさんね」熱田氏は頷いた。「あっくん、あなたのもとかれは、本名はなんというの？」
「……堺田篤司、です」森下氏は静かに答えた。
「堺田篤司」熱田氏はそう復唱しながら、今度は私に顔を向けた。「この名前に、心当たりはありますか」
いかにも何かを探ろうとするかのように、彼女は目を細めて私を見つめ、訊いた。
「いえ」私の声はかすれ、横に振ろうとした首も、一センチ程度しか動かなかった。「ありません」
熱田氏は、しばらく無言で私を見つめ続けた。
じいい、という擬態語がまさにぴったりな、いわば“目で掘る”ような、見つめ方だった。
彼女が何を思っているのか、私には無論、皆目見当もつかなかった。
「堺田、篤司」熱田氏は、私を凝視しながらその名をことさらゆっくりと繰り返した。「わからない？　本当に？」
私は自分の脳内をサーチし、今度ははっきりと、首を左右に数回振った。
「これは、あなたの名前よ」熱田氏は、言った。
その時私は、何故か自分の携帯を尻ポケットから取り出していた。
アドレス帳の、さ行のところを開く。
ああ。
そうか。

「てめえ」

突然、男の野太い声がとどろいた。

「妹に何しやがったこら。おい。ええ。なんとか言え。あつし。おら。あつし」

私はぎゅっと目を瞑った。
その声は、私の脳裏――否、内臓の裏側の辺りに、ずっと、ずうっと、影を潜めていたのだということが、誰に指摘されずとも判った。

確かに、そう言っていたのだ。
足は、そう言いながらずっと、私を蹴っていたのだ。
里野あきみ
そしてその名前もまた、確かにそこにあった。
携帯の、アドレス帳の、「さ行」のところ。
そうだ。
それは。
元カノの名前じゃないか。
私は、安心をおぼえ、久しぶりに笑顔を浮かべた。
「最初に熱田スペシウムを照射した時の様子から、なんとなく思っていたんだけど」熱田氏は静かに話しだした。「霊は“あなたに取り憑いている”のではなく“あなた自身の中に存在する”もしくは“あなた自身がその霊である”のではないかと」
「――」
私は、うすく微笑んだ顔のまま熱田氏を見た。
けれど彼女が何を言っているのかよくわからず、その為何も答えることができずにいた。
「やはりそうだったのね。その足の霊は、あなた自身の中にあるもの――ただしあなた自身ではなく、どのようにしてかわからないけれど、あなたの中に入り込んだ、あきみさんのお兄さんの、霊」
「――」
あきみの、お兄さん。
ああ。私は小さくうなずいた。
あの、いつも怒鳴っていた、柄の悪い兄貴か。
そうだ、あの兄貴なら、ＤＶなんてお手のものだろう。
奴が、足だったのだ。
奴が足で、俺をごつごつ蹴っていやがったのだ。

第 19 話

「それで私にも森下君にも、見えなかった」熱田氏は続ける。「こういうのは、初めてだわ。こんなやり方をする霊には、初めて遭った」
「――」私はまた小さくうなずいた。
　なるほど、霊にも霊それぞれのやり方がある、ということなのだろう。
「お兄さんは、あっくんの……堺田篤司の身体の中に入って、彼のあなたに対する暴力を止めた」
　熱田氏が相も変わらず確認復唱している。
「あなたの力で」
　趣味か。このおばさんの。
「具体的に、どうやって？」
「兄の魂を、ダイモニアとしてあっくんに取り込ませました」あきみが、ますますもって低く答える。
「ダイモニア？」熱田氏が、立てかけた太い腕の横に顔を並べるように突き出して、問いかけた。「ダイモニアというのは？　　霊の一種？」
「霊というか……人と、神の中間的な存在です」
「へえー」あきみの答えに対し、熱田氏はマンボウが口紅を引いたような口で感心した。
「つまりそれが、あなたの “力” ということなのね」
「はい」あきみが、小さく頷く。
「お兄さんは亡くなったの？」熱田氏が更に質問する。
　あきみは少し間を置いたあと「はい」と、頷いた。
「そしてお兄さんは今、ダイモニアとして堺田篤司の中にいるというわけね」
「はい」
　あきみが答える。低い声だ。風邪をひいているのか。男のようだ。
「彼の中で、何をしているの？」熱田氏が質問する。
「今はただ」あきみはゆっくりと首を振った。「あっくんの中で、呼吸をしているだけです」
「呼吸？」
「アニマとして」
「アニマっていうのは？」
　あきみの口から次々と繰り出される専門用語に、熱田氏はついていけていなかった。
　やはりこのおばさんは、エセなのか。
　お祓い詐欺なのか。

「魂の……元というか、原料のようなものです」
「へえー」また、化粧マンボウの口が感嘆の声を発する。
　まったく、勘弁してくれよ。
　あんた、何屋なんだよ。
「じゃあお兄さんは、今現在はもうあっくんを止めたり、彼に攻撃したり、していないのね？」
「はい」
　嘘だ。
　私の唇だけがそう動いた。
　だが声は出てこなかった。
「その、はずです」
「単刀直入に聞くけれど、あなたがお兄さんを殺害したってこと？」熱田氏が訊いた。
「――」あきみは固まった。
「お兄さんがダイモニアになるためには、死ぬ必要があったってことよね？」
「はい」あきみがまた頷く。「兄は……ダイモニアと化すために、薬で自殺しました」
　しばらく、熱田氏もあきみも私も、ものを言わなかった。
「自殺」復唱したのはやはり熱田氏だった。「お兄さんが、自らそう、意図して」
「兄は、私の力のことを知っていたので、それで」あきみは再び震え始めた。「俺があつしをコントロールするから、あいつの中に入れろって」
「へえー」熱田氏の返答は、馬鹿かと思うほど普通だった。「そう。そういうことだったのね」それから彼女は、まぶしそうに目を細めて私を見た。
　何のことだろう。
　否、すでに私にとってはどうでもよかった。
　私は熱田氏の、たっぷり肉のついた喉元に向かって、両手を伸ばした。
　そうだ。
　今の私には、足だけでなく、手があるのだ。
　いい加減このおばさんの存在にも、辟易だ。
　こいつを始末してしまえば、後は好きなだけあつしを蹴り続けていられるのだ。
　呼吸しているだけだって？
　あきみ。
　お前、知らないんだな。
　そこまでの知識は、持ってなかったんだな。
　よし。
　兄ちゃんが、教えてやるよ。
　ダイモニアはな、割と完全無欠なんだよ。
　うん。
　自分でいうのも、なんだけどな。
　足で蹴ることだって、ほらこうやって、手で喉首を締め上げることだって、自在に操れるんだ。こいつの体を。

だってこいつの中枢神経に、今俺は乗っかっているわけだからな。
俺が動かしてやってるから、こいつはヒトとして生きて動いていられるわけだ。

「あつ……た……さん」

苦しげな、男の声が聞えてきた。
どこから、だろう。
まるで、喉首を締め上げられているような、苦しそうな声……
俺が、締め上げているのか？
いや、違う。
俺が締め上げているのは、熱田という中年のおばさんの喉首だ。
男ではない。
男……そうだ。
この声は、あきみの声だ。
「あつた……さん……」
あきみが、熱田氏を呼んでいる。
よせ、あきみ。
熱田というババアは、兄ちゃんが始末してやるから。
もう、関わり合いになるのはよせ。
この女は、穢れている。
「ん？　森下君？」
熱田氏が、普通に答える。
え？　普通に？
どういうことだ？
だって今、俺がこいつの喉首を、両手でもって、こう――
それは、腕だった。
熱田氏の、大根のような前腕を、俺の両手が締め上げているさまが、目の前に現れた。
おお。
その時の俺は、素直に率直に、感嘆――感動、していた。
腕、だったのか。
腕、だったとは。
いや、なんてほど良い太さの、腕だろう。
丁度、男の手のひらふたつ分の円周の。
そう、普通の人間でいえば丁度、首くらいの太さの、
前腕。
「どした？　森下君」
熱田氏は腕を俺に締めさせたまま、顔だけ横に、あきみの方に向けて訊いた。
「この、人……おいだし、て、もらえます、か」とぎれがちに、あきみは男のかすれ声で答えた。「熱スペ……はずれて、今、すげ……パニク……てて」

「ああー」熱田氏がうなずきながら、サイレンのような声を上げた。
「熱田スペシウムをはずしたから、あっくんが見えるようになっちゃったのね。あきみさん」
「嫌だ。やめて」あきみは金切り声で叫んだ。「来ないで。嫌だ」
「はいはい」
　熱田氏は、私が締め上げている方の腕で持っていた数珠を、反対の手で取り上げ、あきみに向かってまっすぐに差し伸べた。
　そうしながら、何かの経を短く唱え、
「帰りなさい」
と、命令する。
　途端に、あきみの体ががくりと前のめりに崩れた。
　が、すぐに起き上がり、立ち上がったかと思うと、あきみは――
　俺の右側の耳の辺りに、目にも止まらぬスピードで、ミドルキックを見舞った。

　きいいいいん。

　強烈な金属音を聞きながら、俺はフローリングの床の上に倒れた。
　無論両手は、熱田氏の首――と思いつつ締めていた前腕から、ふりほどかれた。
　すぐに立ち上がろうとしたが、その時俺に熱田スペシウムが最大レベルの出力で――つまり今までとは比較にならないほど大量に、照射された。
　というか、ぶち当てられた。
　目に見えもしないその“なにか”が、ものすごい勢いと厚みでもって、俺の全身にぶち当たり、俺は再び床の上に、仰向けに転がされた。
　微塵も、身動きできなかった。
　天井しか、見ることができない。
　そして、その時俺の脳内にある言葉はただ一つ

「殺してくれ」

だった。
　この世のものとは思えない、苦しさが俺中を襲っていた。
　圧迫感、とか、倦怠感、とか、疼痛、とか、あと呼吸困難、とか、恐らく心室細動、とかも、とにかく体の異常さを示す症状がすべて混ざくり合って、俺に一斉攻撃をしかけてきているようだった。
　早く、開放してくれ。
　ここから、出してくれ。
　消してくれ。

「やめてよ、あっくん」

　あきみの声――本来の、鈴を鳴らすようなか細い声。
「痛いよ。やめてよ」
　そうだ。
　俺はあつしの中に入って、初めてあきみがこいつから受けていた暴力の真実を目の当たりにしたんだ。
　あつしの記憶を見て。
　顔中に痣を作っていたあきみ。
　こいつはその顔の記憶を鮮明に持っていた。
　持っていやがった。
　あきみの、泣きながら許しを乞う声の記憶も。
　俺はこいつをあきみの元から遠ざけ近づかないようにだけするつもりだったが、それを見てしまった以上到底それだけでは許せなかった。
　蹴り続けた。
　こいつの命が尽きる日まで、蹴っ飛ばし続けてやろうと思っていた。
　でも、もういい。
　もう、いいから。
　もう、やめますから。
　だから、消して下さい。
　俺を。

「どしたの、森下君？」遠くの方から、熱田氏の声が聞える。「早く、楽にしたげて」

　そうだ。森下。
　早く俺を楽にしてくれ。早く！
「あーと」森下氏の、気まずげな声が続く。「あきみさんのお兄さんの、名前確認すんの、忘れてました」
「もーう」熱田氏の、呆れ果てたという風情の声がしたが、それであっても熱田スペシウムの凄まじさ加減に微塵たりとも変化はなかった。
　ああ。
　プロだ。
　この人は。
　熱田スペシウムの、プロなのだ。
　なるほど、この人なら。
　俺を浄霊することぐらい、たやすいのだろう。
「もう、あれでいいわよ。あきみさんのお兄さん、で」
「はぇ」森下氏は例のだるそうな返事の後、風のように「すいません」と囁いた。
　薄く開いた俺の目に、天井を遮って森下氏の眼鏡の顔がぬうと現れた。
　それから更に、彼の顔を遮って彼の手が現れ、それは俺の額に当てられた。
　その向こうで森下氏は、別の方の手の人差し指と中指を揃えて唇に当て、ぶつぶつと

経を唱え始めた。
「あきみさんのお兄さん」
　俺を呼ぶ。
　俺は、返事をしようとした。
　だがその希望は、かなわなかった。
　俺の唇もご他聞にもれず熱田スペシウムの支配下にあり、つまりはぴくりとも動かすことができなかった。
　眼球を動かすことも、瞬きをすることも、できなかった。
「堺田篤司さんの体から出て、行くべき場所へ行ってください」
　森下氏はそう言ってからまた経を唱える。
　少しずつ、俺を締め付けるものが――というか絞り上げるものが、緩んでくるのがわかった。
　ああ。
　いいぞ。
　この調子だ。
「もうそこは、あきみさんのお兄さんのいる場所じゃありません」
　うん。
　そうだな。
　もう、こんな所にいなくても、いいじゃないか。
　もっと明るくて、広くて、空気のうまい場所が、あるはずだ。
　居心地の好い、場所が。
　どんどん、体が軽くなってくる。
　もう少しだ。
　瞼が震え、俺は目を閉じた。
　閉じることが、できた。
「あきみさんのお兄さん」森下氏が、また俺を呼ぶ。
　なんとなく、それが “最後” だという感じが、した。
「楽に、なってください」
　はい。
　そうします。
　次の瞬間、俺の体はすべての呪縛から解き放たれるかのように、重量と質量を完全に失った。

　あ　き　み

第 20 話（了）

「終わりましたよー」
　熱田氏の声で、私は目を開けた。
　のろのろと起き上がると、最初に、玉の汗を浮かべて今にも気絶しそうに茫然としている森下氏の顔が目に入った。
　そんなに、体力を使ったのか。
　私には意外に思われた。
　経を唱えたり、あきみの兄貴に語りかけたりしているのは薄らぼんやりと聞えていたが、そんなに大変な作業だとは思いもしなかった。
　精神的重労働だったということか。
　それはそうだろう。
　なにしろ “浄霊” をしたのだから。
　それは確かに、簡単なものではなかったはずだ。
「お疲れす」森下氏は、心配そうに見つめる私に二センチほど会釈し、部屋の隅に歩いていった。
　森下氏の後ろにいた熱田氏の姿が、今度は目に入った。
「えーと、まず」熱田氏は、熱田スペシウムを放ち続けていたのであろう方の腕をさすりながら、私に訊いてきた。「あなたのお名前は？」
「堺田篤司です」私は答えた。
「うん」熱田氏はニッコリと微笑んだ。「戻ってきたわね。自分自身が」
「え？」私は、眉を上げて訊き返した。
「あなたの脳みそはずっと、あきみさんのお兄さんに乗っ取られていたのよ」熱田氏は、私の頭を指差した。「よね？」森下氏に確認する。
　森下氏は汗を拭いているところで、タオルの下から片目だけ覗かせ、こくりと頷いた。
「そしてお兄さんは、その状態であなたに、制裁を加えていた――つまり足で蹴られているというイメージを、あなたの脳みその中に投影させていたと、そういうことよ」
「――すべて、幻だった、と」私は茫然と、呟くように言った。
「感覚とか知覚とかは本物だったはずっすよ。痛みとか」森下氏がタオルを首に巻きながら答える。「脳では実際に、足も見えていた。けど、本当には存在しないから、触ることはできなかった」
「それで、あなた自身は単なる操り人形として、自分の名前も、あきみさんの顔も声も、忘れさせられていたということよ」
「ていうか、記憶貯蔵庫から検索する権限を制御されてたんす」
「――」私は目をしばたたかせた。

「森下君が言うと、話が小難しくなるからいいわ」熱田氏が、彼女にしては珍しく眉をひそめた。
　森下氏は若干唇をとがらせながら、眼鏡をかけ直した。
「それで、時々お兄さんの呪縛が緩んだときに、あなた自身が目を覚まして、その隙間で今回の浄霊の依頼にこぎつけた、というわけよ。まあよかったわね」熱田氏は私の上腕をぱしぱし叩きながら、（恐らく）ねぎらってくれた。「ところで、あなたボーナス月はいつ？」それから熱田氏は唐突に問いかけてきた。
「……」私はすぐに答えられずにいた。「７月と、12 月です」やがて、私は質問に対する答えを発することができた。
　私の内部に、脳の中に、現実世界というものが蘇りつつある。という実感が、不意に私の体を包みこんだ。
「そう」熱田氏は頷いた。「今回の件は、あなた自身の過失分の追加料金が発生するから」まっすぐに私を見ながら、特に他意もなくさらさらと事務的に話す。
　私の方はただうなだれて「はい」と神妙に答えるしかなかった。
　元カノ、あきみの、怯えた顔が脳裏に浮かぶ――
　だがもう、声は聞えてこなかった。
　あの声も、あきみの兄貴が聞かせていたものだったのか。
「まあ、後で請求明細を送るわね。それから、と」熱田氏は、今度は森下氏の方を見た。「森下君、あきみさんのマンションの位置、わかる？」
「……はぇ」森下氏が答えた。
　久しぶりに聞く、紛れもない森下氏の、やる気のなさそうな返事だ。
「明日にでも、スカウトしに行きましょう。彼女の能力、使えそうだし」熱田氏はてきぱきと計画を述べた。「君、まだ今月の勧誘ノルマ、達成してないでしょ」
「ぁぇ」森下氏は足元を見、消え入りそうな声で返事した。
　なるほど。私は小さく頷いた。
　ノルマ、か。
　霊媒師の世界も、なかなか大変なのだろう。
　森下氏に、少しだけ同情を覚えた。
　お礼というわけでもないが、何か私に、手伝えることがあれば。
「あの」私は思い切って提案の言葉をかけた。「私……あきみに、話してみましょうか、その……スカウトの、件」
　熱田氏と森下氏が一斉に私を見た。
　思わず、薄ら笑いを浮かべてしまう。恐らく卑屈を絵に描いたような顔をしているのだろう、今の私は。
「結構よ」熱田氏がきっぱりと答える。「ちょっと、あなたの携帯を貸してもらえる？」
　私は、がっかりしなかったといえば嘘になるが、ともかく指示の通り携帯を手渡した。
　熱田氏はそれをそのまま森下氏に手渡し、「消して」と言った。
「はぇ」森下氏が素早く操作をする。
　消すって……あ。
　私が気づいた時にはすでにそれは “消された” らしく、森下氏は私の携帯を私に差し出

した。
　慌てて、アドレス帳を開く。「さ行」のところだ。
　確かに、里野あきみのデータはきれいに消されていた。
「あなたはもう二度と、あきみさんに近づかないこと」熱田氏はまっすぐに私を見て言った。「もうおわかりと思うけど、今回ＤＶを行っていたのはあきみさんのお兄さんの“足”ではなく、そもそもあなた自身だったということ。今後あきみさんに近づいたら、今度は私たちが、あなたに“制裁”を加えることになります。いいわね？」
「……はい」
　私は頷き……というか深く頭を垂れ、承知した。
　制裁。
　その言葉の威力は意外なほどに強く、私はひとことで言えば
「もう、たくさんだ」
と、思っていた。
　兄貴の足蹴りにしろ。
　森下氏のミドルキックにしろ。
　熱田スペシウムにしろ。
　そう、なんといっても、なにをおいても、熱田スペシウムなんて、もう。
　たくさんだ。
「人と、神の中間の存在」不意に熱田氏はそう言い、私の部屋の天井付近をぐるりと見回した。「なるほどね。それだから、この部屋には、低級霊のようなものがまったく存在していなかったのね。あのお兄さんを、畏れて」
　私も、熱田氏に倣って部屋を見回した。
　私にとって、いつもの自分の部屋の光景であることに、なんら変わりはない。
「じゃ。お疲れさま」熱田氏は最後、ひときわ元気よく言葉をかけた。
　そして茫然と見送る私を振り返ることもなく、熱田氏と森下氏は、部屋を出ていった。
　部屋は真の意味で、静かになった。

◇◆◇

　それ以来、足は一度も姿を見せていない。
　その代わり、夜中寝ている時、ピシリ、ピシリという、いわゆる“ラップ音”が、聞えるようになった。
“低級霊”というものが、寄りつけるようになった、ということだろう。
　まあ、よかったじゃないか。
　妙な話かも知れないが、私は却ってその現象を、微笑ましいと感じるのだった。
　少なくとも、こいつらは私に“痛み”を、もたらしたりしないからだ。
“浄霊”――する必要も、特にないだろう。
　ピシリ。ピシリ。ピシリ。
　ああ。
　平和な、夜だ。

「理不尽」
という単語が、ふと私の脳裏に浮かんだ。
　理不尽――なにが？
　まったくもって、理にかなっている。
　理不尽なことなんて、なんにもない。うん。
　さあ、寝よう。
　おやすみ。

　あ　き　み

　うふふふ。
〈了〉

DV幽霊

著　　葵むらさき

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社